

観光地づくりオーラルヒストリー <第3回>

私の「観光からのまちづくり」

リージョナル プランニング 代表 前田 豪

1943(昭和18)年東京生まれ、1970(昭和45)年東京大学農学部生物系大学院(林学科造園学研究室)博士課程中退。同年(株)ラック計画研究所入所、以来一貫して観光計画のコンサルタント業務に従事。1990(平成2)年リージョナル プランニングを設立し、観光計画(観光からのまちづくり)を柱としたコンサルタント業務を継続、現在に至る。

目 次

1. 「観光」への接近	3
(1) 観光との出会い	3
●東京大学農学部林学科造園学研究室が原点	3
●“大学コンサルタント”で実戦勉強	4
●メッシュ法の観光計画への適用	4
●ラック計画研究所に入社し、本格的に観光計画にのめり込む	5
●“空軍的活動”から“陸軍的活動”に方向転換	6
●ラック計画研究所との“二足の草鞋”から 自前のリージョナル プランニングを設立	6
2. 「観光」における取り組み	10
(1) 観光分野で何をやってきたのか	10
●最初に取り組んだのが「観光調査」	10
●大きな影響を受けた「住んでよし・訪れたくなるまちづくり」のアプローチ	13
●大きかった宮崎県との関わり、故岩切章太郎氏に教わった「大きなソロバン」	15
その1－須美江家族旅行村	15
その2－綾町	17
その3－南郷村	18
その4－西米良村	20
その5－宮崎県県南地域	23
●「観光計画」に関する著作。基本は「経験してきたことを書く」	25
●言いたいことを言ってきた講演と教育	28
(2) 観光分野での業績や功績	29
●観光プランナーとして「実現すること」を前提として取り組んできたこと	29

● 20年にわたる西米良村の取り組みを通じて……………	32
3. 「観光」に対する失敗と反省……………	38
(1) 我が国の観光の何が問題か……………	38
①「観光」に対する捉え方が明確に共有されていないこと……………	38
②「観光資源」の内容も変わってきたことに対応し切れていないこと……………	39
③行政に観光の専門家が極端に少ないこと……………	40
④学童に対する「観光教育」が不在であること……………	41
(2) 我が国の観光政策は有効に機能してきたか……………	42
●旧運輸省の「家族旅行村」の原案作成から実際の計画・設計までに携わって…	42
●旧厚生省の「大規模年金保養基地」は大失敗だった……………	43
●大規模保養基地整備法を通称リゾート法と呼んだことが間違いだった……………	44
(3) 私は観光分野で何を失敗し、反省しているか……………	45
●計画対象地の歴史・風土の理解が不十分だった	
山形のワインレッド・クアパーク……………	45
●本格的なリゾート・ライフの経験も無いままに	
「想い」だけが先行した鳥羽浜離宮……………	46
●「夜郎自大」だった大規模リゾート計画……………	48
●書き残したい『私製観光黒書』……………	49
4. 「観光」の計画と実現……………	51
(1) 私が関与した「観光計画」は実現したか……………	51
●観光施設としては盛岡手づくり村を除いて反省点も多い……………	51
●観光からのまちづくりは、結構実現していますが……………	52
(2) (一般的に)観光計画はなぜ実現しないのか……………	52
●発注者に「実現させる強い意欲」に欠けること……………	52
●観光をよく知らない人が計画していること……………	53
5. これからの「観光」・「観光地づくり」・「観光計画」への提言	
ーこれからのわが国の観光、観光地づくりに必要なことは何か……………	54
①観光の意味・意義と共にふるさと磨きの必要性を	
国民一人一人が自覚すること……………	54
②集落単位で「観光からのまちづくり」を進めること……………	56
③不易流行の「不易」を大切にすること……………	57
④学童に対する「観光教育」を進めること……………	58

1. 「観光」への接近

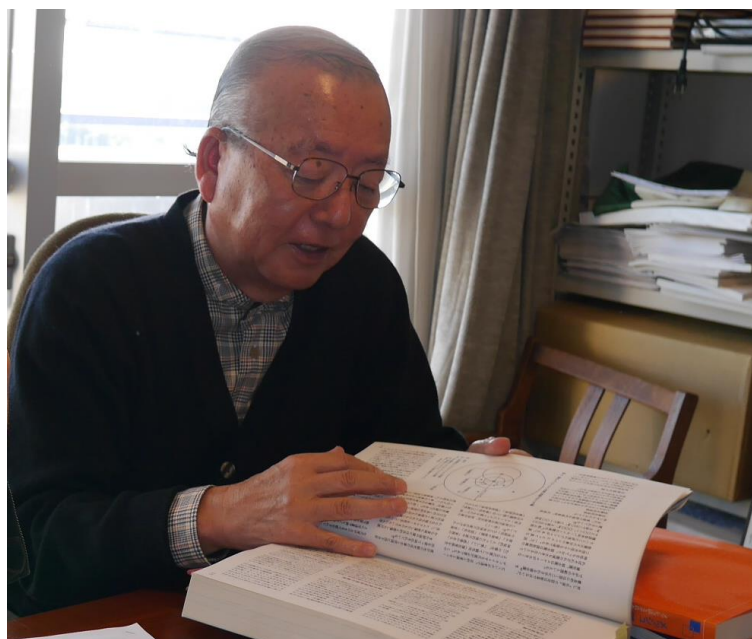
(1) 観光との出会い

●東京大学農学部林学科造園学研究室が原点

生まれは東京都杉並区の、善福寺近くの旧三谷町(現桃井四丁目)です。旧町名縁の滝と谷の他、まだまだ多くの田畑が残っており、善福寺川で魚を捕ったり、裏の田圃の米を刈り取った後でザリガニ採りを楽しんだりして、まあまあのびのび暮らすことが出来ました。そして住宅がどんどん増え、かつ農薬が普及するにつれ、川が下水道化し、畑からモンシロチョウが消え、そしてその畑も宅地化し、農の風景が消えていくのを目の当たりにしました。

1962(昭和37)年、幸運にも東京大学の、この年に理科3類から分離した理科Ⅱ類に現役入学でき、親の了解もあって大いに遊び、旅行したり、習字や益子で陶芸を習ったり、目的無しに漂流していた結果、農学部林学科に進学しました。水産か獣医ぐらいしか選択肢がありませんでしたが、4年(1965(昭和40)年)の時に選んだ講座が、造林研究室の“庶子”とも言える造園学研究室で、ここで始めて観光に触れ、これがその後の進路を決めることになりました。

この研究室は、現在は森林風致研究室として独立し、観光からはかなり離れてしまいましたが、元々の研究室は本多静六先生などが奔走して設置したと聞いており、昭和初期には田村剛先生が国立公園の制定などにも関わっていたようです。本多先生個人は、日比谷公園の設計に関わった他、「由布院温泉発展策」など今でいうところの観光開発計画も実に多く手掛け、観光の色合いが強い活動をされていたようです。そういう意味で、小生と観光計画との出会いの原点は、この造園学研究室です。



<写真>取材風景—リージョナル プランニング事務所(2014年11月6日)

● “大学コンサルタント”で実戦勉強

大学4年から大学院にかけての5年間(1965(昭和40)年から1970(昭和45)年)、今でいうところの“コンサルタント的な調査”として、静岡県発注の伊豆半島の観光振興調査や北海道庁発注の野幌森林公園計画などをやっていました。その当時、観光を手掛けるコンサルは皆無でしたから、コンペにも参加し、武蔵丘陵の国営公園のコンペでは3位でした。教室の責任者は塩田敏志先生で、身分は助手でした。教室の大学院生は小生だけでしたから、学士入学で建築科も出られた塩田さんの建築も含めた教をたっぷり受けつつ、言ってみればオン・ザ・ジョブ・トレーニングで、観光計画の一端を学ぶことが出来ました。我々の給料はなく、ご褒美は夕食に大学近所の美味しい店での食事、うまい物に目覚めました。

ともあれ学問的には、観光は本流どころか傍流にも存在せず、わずかに東大農学部 of 林学の一講座の片隅で息づいていたという感じでした。因みに立教大学に常設の公開講座「ホテル講座」が出来たのは、1971(昭和46)年で、観光というよりまさにホテル経営の講座でした。学生時代、一番参考になったのは、井上万寿蔵氏が書かれた『観光教室』朝日新聞、1957(昭和22)年です。不勉強でしたので、そのぐらいしか観光に関する参考書を読まなかったように記憶しています。

大学院時代に塩田先生方の指導の下で、旧(社)日本観光協会(現在の(公社)日本観光振興協会)が発行していた『観光』No. 17に「自然風景計画のための景観解析Ⅲ眺望景観」という原稿を書いたのは、1968(昭和43)年1月です。それ以前のことはよく解りませんが、一般の人は「景観」という言葉を殆ど知らなかったのではないのでしょうか。有名な古文の先生だった塩田先生のお父さんでも知らず(?)、「『鶏姦(この意味に関心がある人は、独自に辞書をお引き下さい)』かい?」と揶揄されたくらいですから。当然、景観に関する論文も殆ど無く(?)。何事も全否定は凄く大変ですので、あくまでも小生の“寡聞”にしての話です。以下同様です)、風景や景色と言っていたと思います。景観という言葉、観光計画で使ったのは、東大が初めてじゃないのでしょうか。

●メッシュ法の観光計画への適用

私の卒業論文は、前述した受託調査に便乗し、1ヶ月間伊豆に滞在しての伊豆半島の海水浴場の実態調査でした。東大の観光関係のドクター第1号であられる鈴木忠義先生のドクター論文「海水浴場計画(?)」と同じく、林学なのに「なんで海水浴場?」と冷やかされました。出来上がったしろものは、学位論文というのはおこがましく、出来が悪い高校生レベルの調査レポートで、「穴があったら入りたい」ぐらいです。なんともお粗末でした。

「いくらなんでもこれではまずい」と考え、遅まきながら修士論文のあたりから観光計画ということを強く意識するようになり、その頃注目され始めたメッシュ法にのめり込みました。メッシュ法というのは、地域をメッシュ(網の目)に切り、各メッシュ毎に

必要なデータを収集して分析したり、統合する方法です。当時急速に普及し始めたコンピューターを使い、それで広域の景観計画とか県の土地利用計画に活用できると思っていました。ちょうど東大に、日立のHITACという大型計算機が入り、院生は無料で使えたので、あまり数学が得意ではないにもかかわらずコンピューターに狂っていました。その一例が、北海道庁の依頼で行った『支笏湖周辺観光資源開発計画』1967で、メッシュを使って景観構造を分析し、景観計画を作成したことがありました。

1970(昭和45)年に博士課程を中退し、鈴木忠義先生を後ろ盾にして小生の4年先輩である三田育男氏が所長をされ、大学院や学部出たての造園(Landscape architecture)・建築(Architecture)・土木(Civilengineering)を専門とするスタッフからなるラック(LAC)計画研究所に入社しました。昭和43(1968)年に東大騒動で安田講堂が占拠され、学内は騒然とし、小生も林学大学院の委員長(!?)でしたが、このまま『阿Q正伝』のように本質を理解しないままに、空疎な議論をしても埒があかないと考え、前年の昭和44(1969)年に設立されたラックに参加したわけです。大阪万博が開催された年で、国全体が高揚感に包まれていたように記憶しています。

●ラック計画研究所に入社し、本格的に観光計画にのめり込む

ラックで最初に手掛けたのが(財)国土計画協会から委託された『滋賀県自然保護計画』1970で、メッシュ法を駆使して滋賀県全域を17タイプの保護区分を設定しています(右がその結果)。試行錯誤やプログラムエラーなどで、連続二晩ぐらい徹夜してコンピューターを回していました。当時民間の大型コンピューターの賃借料は30分あたり1万数千円で、エラーする度に何万円かが失われるわけですから、必死でした。初任給が3万円の時代です。小生にとって社会人になって最初の仕事ですから、当然印象に残っているわけですが、発注者の(財)国土計画協会の担当者だった福田さんも強く印象に残っていたのか、それ以降交誼が今も続いています。

メッシュ法利用の第2弾が、当時の運輸省から(財)日本交通公社に発注された『全国観光資源調査』1971~1973です。

基本的に全国を10kmのメッシュに切り、そこに観光資源やレクリエーション資源や施設をプロットするだけですが、作業は膨大でした。これを応用して全国の観光資源と利用の需給関係を調べたのが、当時は同僚で後に東工大の教授になり、10年ほど前になくなった渡辺貴介さんと一緒にやった自主研究「観光・レクリエーション資源の評価方法とその展開;国土の定住構想への接近」『都市計画』1976(昭和51)年6月です。これからの住まい方には、観光・レクリエーションが必要不可欠になり、その需給関係をメッシュで調べようとしたわけです。『全国観光資源調査』も旧運輸省が発注しているのは、

図一 7 自然保護区分のアウト・プット

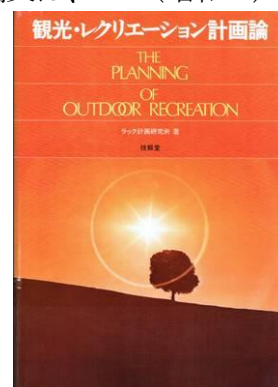


これからの交通機関の需給に、観光が大きく係わってくるという判断からでした。ともあれ「メッシュでなんでも出来る」とはいかないまでも、「かなり使える」と舞い上がっていました。

そしてその年に「メッシュ法とそれを応用した観光・レクリエーション計画技法に関する研究」という博士(請求)論文を書き、博士号を得ました。この論文は、1978(昭和53)年度の造園学会賞も受賞していますが、今となってはあまり利用価値もなく、恥ずかしい限りです。

● “空軍的活動” から “陸軍的活動” に方向転換

ラックに入社して5年目の1975(昭和50)年に、ラック計画研究所のスタッフ全員で書いた、『観光・レクリエーション計画論』技法堂(右はその表紙)が一つの転機になりました。この本は日本最初の観光計画論と言えるかと思いますが、まだろくに実戦経験が無いにもかかわらず、丁度その当時同僚だった渡辺貴介氏と競い合うようにドクター論文を書いていたこともあり、やたらと大上段に振りかぶった本でした。しかし、この本を読んだ静岡県観光課の方が、「町として初めての観光計画を作成したいが、どこか良いところがないだろうか」と相談に来た西伊豆町観光課の職員に弊社を紹介していただき、それを小生が担当することになり、「観光からのまちづくり」を初めて実践することになりました。それ以前は、実戦経験どころか、さほど観光地(遊びで行った観光地の経験は、まったく役に立ちません。あくまでも仕事からみで行った観光地のこと)もろくに知らないままに、観光計画論や全国の観光資源調査を専らとしており、いわば“空軍的”な活動だったのに対して、狭い地域を何度も歩き回る“陸軍的”な行動に変わっていったわけです。1976(昭和51)年のことでした。



●ラック計画研究所との“二足の草鞋”から自前のリージョナル プランニングを設立

三田所長が決めたラックの55歳定年制は、一つの卓見だったと思います。コンサルタントとしての創造力や体力を考えますと、55歳あたりが一つの限界でしょうから。ただ、人生はまだ続きますし、やり方次第でまだまだ“前田豪流”の観光計画は出来ると思っていました。ですから、1990(平成元)年、47歳の時にリージョナル プランニングという株式会社を設立し、55歳まで二足の草鞋を履き、その後はリージョナル プランニング一筋で今日までやってきました。

1987(昭和62)年に総合保養地域整備法が施行され、空前のリゾートブームが起きました。戦後の最初のリゾートブームは、田中首相の列島改造(1972(昭和47)年)に伴う“別荘地(になりそうな土地)漁り”で、現地を見もせず投機的な需要が膨れましたが、石油ショック(1973(昭和48)年)であえなく縮みました。今度は金余りもあり、生活大国を目指す上で別荘ぐらい持たなくては、といった漠とした思いが国民にあり、前回が“虚需”だとすれば今度は“実需”だということで、様々な民間企業から大規模総合リゾー

ト計画の作成依頼が殺到しました。丁度、二足の草鞋を履き始めた頃でしたから、調査費用の安い市町村単位の計画などはまともに引き受けられないぐらいの、てんてこ舞いの忙しさでした。年間で10件以上をチーフとして担当し、同時でも5、6件のプロジェクトをこなしていましたから、原稿はテープに吹き込み、それを秘書に打ってもらい、それに朱を入れ、追加はまたテープに吹き込むというやり方をしていました。列車の連結器のところで、テープを吹き込んだことも多々ありました。このテープを利用するやり方は、自分でワープロを打つようになった2003(平成15)年まで続けていました。しかし、リゾートブームは1988(昭和63)年頃から1995(平成7)年ぐらいの短い期間で、まさにあっという間に瓦解してしまいました。一時的に小金を持ちましたが、リゾートをしっかり実践するだけのバック(経験や有給休暇の消費等)がまったく未成熟だったのが原因でした。

その間、大規模総合リゾート計画調査を、20数件手掛けました。いずれも民間(不動産やリゾート開発、建設会社、金融関連等)からの発注で、しかも地域振興とはいえ、専門家筋の「金儲け」の話でもありますから、建設費の算定から事業計画の作成まで実にシビアで、随分勉強になりました。調査に関連して、海外のかなり高級なリゾート地も見に行きました。フロリダのボカラトン、ハワイ島のハイアットリージェンシー・ワイコロア、イタリア・サルディニア島のコスタ・スメラルダ、フランス・コートダジュールのポール・グリモ等々。

完全に独立した1995(平成7)年以降は、バブル経済崩壊に伴って観光市場がどんどん冷えていく中で、それをカバーするが如くの市町村レベルの観光開発がちょびっと盛り上がり、そうした計画調査を中心にしていました。「そろそろ引退しようかな」という想いも頭をかすめ、仕事の間口を広げることやしゃにむに営業することは、まったく考えませんでした。もともと営業活動は殆どしたことがありませんでしたから、会社が縮小していくのも、「こんなもんかな」と思っていました。

しかし、振り返って考えますと独立するのは、かなり遅かったと思います。私が思うに、会社を作るのは40歳が限界ではないかなと思います。それぐらいの歳ならば、大学院出たての若いスタッフが、締め切りや手が回りかねるボリュームの仕事を抱え、もたついていても、手間取っている仕事を全部引き受けてこなすことも出来たかなと思います。その意味で、リクルートが入社後10年か、40歳になったら会社を辞めるというルールは腑に落ちます。しかし、50歳近くなりますとそうもいかず、勢い若いスタッフにかなりの仕事を割り付け、その尻を叩き続けてなんとか帳尻を合わせるようなこともあり、過剰な負担を掛け、結果的に組織のひび割れにつながっていったように思います。全ての仕事にしっかり係わり、かつ自分流を貫きましたから、組織を作り、後継者を育てる能力は欠けていたように思います。ただ、その結果、ほぼ100%の仕事に関して、“前田豪流”は出せたと考えています。

65歳の時も仕事を辞めようかなと思いましたが、現実的には65歳以降にも生活があったわけで、自宅以外の居所確保(これは非常に重要でした)や経済的な要件もさりながら、もう少し自分の経験を活かして、「観光からのまちづくり」でお役に立ちたいという気持ち強く、現在も宮崎県西米良村などの仕事を続けているわけです。ある人から「テーマをしっかりと絞り込み、それを専らとしているからこそ、70歳を過ぎても仕事依頼があるのですよ」と言われ、そうかなと思っています。

表－１ 前田 豪の活動年表

年	歳	活 動 内 容
1943(昭和18)年	0	東京都杉並区桃井4丁目(旧三谷町57)に生まれる
1962(昭和37)年	19	東京大学理科Ⅱ類に入学、大いに遊ぶ
1964(昭和39)年	21	東京大学農学部林学科に進学
1965(昭和40)年	22	東京大学農学部林学科造林学研究室造園学教室に入り、観光に出会う
1966(昭和41)年	23	同上卒業、東京大学農学部生物系大学院修士課程に進学 伊豆半島観光資源開発試論
1968(昭和43)年	25	同上卒業、東京大学農学部生物系大学院博士課程に進学 野幌森林公園基本計画、伊豆丸野山周辺苑地計画
1970(昭和45)年	27	同上退学、ラック計画研究所入社。初仕事は滋賀県自然保護計画
1971(昭和46)年	28	全国観光資源調査(～1973)、九十九里開発のソフトウェア計画
1972(昭和47)年	29	総合森林レクリエーション・エリア開発モデル調査、別荘地実態調査他
1973(昭和48)年	30	観光レクリエーション施設基準に関する調査研究、総合森林レクリエーション適地選定調査
1974(昭和49)年	31	大規模観光レクリエーション総合調査(～1975)、大規模年金保養基地全体基本計画他
1975(昭和50)年	32	志摩開発計画(前年が構想計画)、大規模観光レクリエーション総合調査他
1976(昭和51)年	33	中規模観光レクリエーション基地総合調査、西伊豆町観光整備基本構想調査他
1977(昭和52)年	34	金沢伝統工芸街構想(～1981)、松崎町観光整備基本構想計画他
1978(昭和53)年	35	賀茂村観光整備基本構想調査、西伊豆町計画管理開始(1978～1983)他
1979(昭和54)年	36	盛岡手づくり村計画(1979～1981)、観光からの町づくり事例研究他
1980(昭和55)年	37	綾町産業・観光振興計画、浅虫地区森林公園基本構想他
1981(昭和56)年	38	西伊豆町内の観光施設に関する調査、黄金崎自然公園整備実施構想他
1982(昭和57)年	39	須美江家族旅行村実施設計(1)、相良エネルギープラザ構想(～1981)他
1983(昭和58)年	40	棚倉町シティスポーツプラザ基本計画、加賀温泉郷活性化構想他
1984(昭和59)年	41	リゾート関連市場動向調査、綾町国際クラフトの城基本設計他
1985(昭和60)年	42	盛岡手づくり村開業、静波プチ・リゾートガーデン計画他
1986(昭和61)年	43	足助町老人白書づくり、宇部市常盤公園再整備計画他
1987(昭和62)年	44	八ヶ岳・野辺山リゾート開発構想、南郷村観光開発調査(百済の里づくり計画)他

1988(昭和63)年	45	南陽クアパーク整備実施計画、1989年基本設計、1990年実施設計協力
1989(昭和64)年	46	韓国・双龍エンジニアリング計画助言業務、片山津レイクサイドリゾート計画他
1990(平成 2)年	47	(株)リージョナルプランニング設立、ラックと二股 第4次宮崎県観光振興計画他
1991(平成 3)年	48	宮崎花の展開戦略、第2次南郷村「百済の里」拡充計画他
1992(平成 4)年	49	『観光・リゾート計画論』出版、南郷村水清谷地区観光開発基本構想他
1993(平成 5)年	50	第6次産業育成モデル研究調査、宮崎県サービス点検調査集計・分析他
1994(平成 6)年	51	西米良村総合産業育成ヒュージビリティ調査、高浜町景観づくり基本計画他
1995(平成 7)年	52	西米良村総合(観光からの村おこし)計画、上越市観光振興5か年計画他
1996(平成 8)年	53	西米良村の助言開始、南郷村観光振興計画、塩沢町観光振興基本計画他
1997(平成 9)年	54	諸塚村全村森林公園化構想、島根県海士町「さざえカレー」産品開発調査他
1998(平成10)年	55	海外リゾート事情調査(以降2006年まで毎年実施、2007年からは自主研究)、(釜山広域市機張郡)観光開発計画、能登島町地域資源調査事業他
1999(平成11)年	56	観光地づくり推進モデル事業、観光地づくりプログラム作成業務他
2000(平成12)年	57	第二次上越市観光振興5か年計画、柳井市花の産地振興ビジョン作成調査他
2001(平成13)年	58	西米良村「川の駅」基本計画、椎葉村長期総合計画他
2002(平成14)年	59	西米良村作小屋村計画、全村森林公園化構想の具体化に関する指導及び助言(2)他
2003(平成15)年	60	西米良村の助言業務及び作小屋村実施計画(Ⅰ)
2004(平成16)年	61	西米良村の助言業務及び作小屋村実施計画(Ⅱ)
2005(平成17)年	62	西米良村の助言業務及び作小屋村実施計画(Ⅲ)
2006(平成18)年	63	東京都大島観光再興計画及びその推進事業(1)
2007(平成19)年	64	東京都大島観光再興計画及びその推進事業(2)、以降「大島町観光応援歌」を送信
2008(平成20)年	65	西米良村の助言は13年目、海外リゾート事情調査12年目
2009(平成21)年	66	下呂市観光計画策定助言・監修、以降「下呂市観光応援歌」を送信
2010(平成22)年	67	下呂市萩原町観光計画策定、以降「萩原町観光応援歌」を送信
2011(平成23)年	68	西米良村の助言は16年目、前年の10月からみやび・宮崎観光応援歌を翌年まで掲載
2012(平成24)年	69	西米良村の助言は17年目、旧須木村すきむらんの再興助言開始
2013(平成25)年	70	西米良村の助言は18年目、旧須木村すきむらんの再興助言2年目
2014(平成26)年	71	西米良村の助言は19年目、旧須木村すきむらんの再興助言3年目

2. 「観光」における取り組み

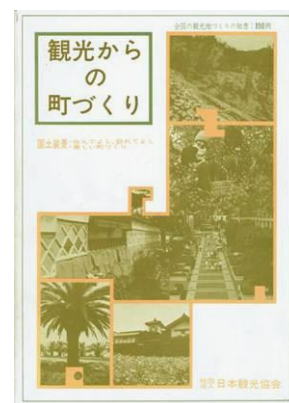
(1) 観光分野で何をやってきたのか

前述したように約半世紀に及ぶ小生の、観光分野でやってきたことを大別してみますと、「観光調査・研究」「観光計画の作成・実現までのプロデュースとその後のフォロー」「観光計画書の執筆」「講演・教育」の4つに分けられそうです。

●最初に取り組んだのが「観光調査」

前述したように、最初はコンピューターを利用した観光計画方法論や観光地づくりのあり方を研究しており、ラックに入ってから数量化理論を利用した観光資源評価を行うようになりました。前述した(財)日本交通公社の『全国観光資源調査』のお手伝いで、観光資源の最終的評価は、その当時多くの観光資源を実際に見られていた鈴木忠義先生や当時の『旅』の編集長岡喜秋さんなどが経験に基づいて、全国の8千あまりの観光資源を、特A級(国際的に通用する資源)、A級(全国民が一度は見るに値する資源)、B級(全国8ブロックの地方の人が一度は見るに値する資源)、C級(都道府県の方が一度は見るに値する資源)というランクで評価をしていました。この評価ランクは、今も有効と考えていますが、この時に設定した「観光資源」という概念は、名所旧跡や神社仏閣、各種文化財、行祭事などで、今も踏襲されている人や地域が多いようです。しかし、我が国と観光先進国との決定的な違いである「街の美しさ」の失念に繋がる、「住んでいる街そのものが最高の観光資源」という考えが、なかなか普及・定着しない一因にもなったのではないかと思います。

調査・研究では、地域開発センターからの依頼で1975(昭和50)年に鈴木先生の指導の下に行った「大規模観光レクリエーション総合調査(第Ⅲ部)実態とあり方」は、まだ机上論であり、かつラフでしたが、観光地整備のあるべき方向が見えたような気がしました。旧(社)日本観光協会と一緒にやる調査・研究も多く、随分勉強させていただきました。その中で、最初に手掛けたと言ってもいいぐらい強く印象に残っているのが、1979(昭和54)年に行った『観光からの町づくり;国土総景・住んでよし・訪れてよし・美しい町づくり』です(右はその表紙)。新聞や雑誌等も含めて、目に付いたあらゆる資料から、国内外の観光先進事例350事例を集め、分類した調査です。先進事例収集調査としては、先駆的と思っていますが、実際に見たわけでもなく、経緯等を含めてしっかり聞いたわけでもないにもかかわらず、臆面無く集めたわけです。自分自身大層勉強になったものの、35年前だったから“先進事例”として許されたわけで、今では“よくないやり方”と考えています。一日ぐらい見聞きした程度で、その施設の良さ・課題は



見えませんし、いわんや「最近流行っているから紹介しよう」というのは、流行り・廃りを増長するやり方ではないでしょうか。

また、『日本型リゾート計画論』(社)日本観光協会 1990 も思い出深い調査です。まさにバブル期真っ盛りで、大規模複合リゾート計画が目白押しの頃でしたが、おしなべて欧米のモノマネのような計画ばかりで、日本にも宇治平等院という現存する最古の別荘があるように、独自の別荘文化を育んだ歴史をもっと大事にして、「日本らしい、上質のリゾートを計画すべき」と、問うた調査書です。こうした考えを踏まえて、三重県の鳥羽に計画したのが「鳥羽浜離宮」なのです。

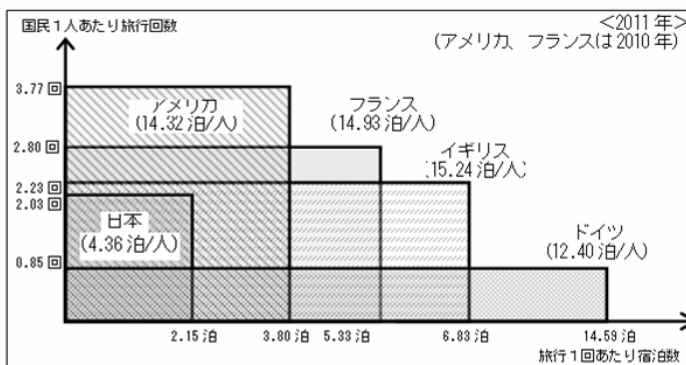
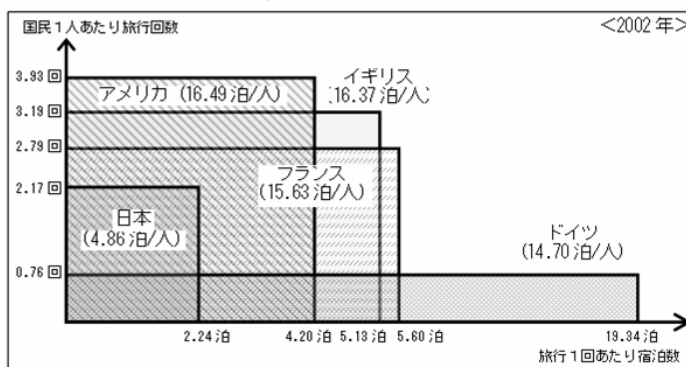
この日本型リゾートの考えを固めていくのに役立ったのが、1986(昭和61)年から始めた『海外観光旅行事情調査』です。これは日本とアメリカ、イギリス、フランス、ドイツの旅行状況を比較したもので、我が国の宿泊旅行の貧弱さに吃驚しています(次頁右上は『海外観光旅行事情 2013』より)。

最初はリゾート事業協会の依頼で始めたものですが、その協会が 2007 年に解散したため、以降は弊社の自主研究として今も続けています。我が国の宿泊旅行の量(回数・1 回あたりの宿泊数・年間宿泊数)は、それら先進国になかなか追いつきませんが、今では量的な差違をつめるのではなく、日帰り旅行を含めて、四季折々いろいろな楽しみ方をしている日本の良さ(これは他の 4 つの先進国には見られないようです?)を、しっかり認識することの方が重要ではないかと思うようになりました。当然それを受け止める空間も、欧米の真似をすることなく、日本と風土の良さを大切に、日本らしいものにすることが、国民にとってもインバウンドを惹き付ける上でも大切と考え、鳥羽浜離宮を考えたわけでした。幸いにして実現しませんでした。が、まだまだ中途半端だったと反省しています。

その他、観光地づくりの考え方・手法を整理したのが、以下の 3 部作です。いずれも 10 年以上も前のものですが、観光計画に携わって約四半世紀になり、観光計画に取り組むスタンスが大体固まり、小生の観光計画手法の体系とも言えるかと思います。

『観光地づくりの手法』(社)日本観光協会 2001

図表 492 国民 1 人あたり年間宿泊数、国民 1 人あたり旅行回数、旅行 1 回あたりの宿泊数の比較



※四捨五入しているため、数値が一致しない場合がある。(図表 0-1) 各データの集計方法を参照

『新世紀の観光地域づくりの手法』（社）日本観光協会 2003

『これからの観光地づくりのための手法』（社）日本観光協会 2004

この調査書を作成するのに大いに役立ったのが、（社）日本観光協会が主催していた「優秀観光地づくり賞」の委員になったことです。この賞は1993（平成5）年から2009（平成21）年まで17回開催され、計70箇所・団体が顕彰されています。小生は、第6回から委員になり、12回から委員長になり、応募されてきた調書を見たり、入賞した観光地を現地視察した関係で、実に多くの観光地のことを知る事が出来ました。そしてこれに係わった12年間の間に、バブル崩壊後の観光不況と言うこともあり、かつての輝きを失っていく観光地を見聞することも多くなってきました。そんなことから2008（平成20）年秋号から2011（平成23）年冬号までの10回にわたり、「優秀観光地づくり賞」受賞観光地の『今』という記事を連載させていただき、それをベースに加筆して纏めたものが、私製本『「優秀観光地づくり賞」受賞観光地の『今』』です（右はその表紙）。何処もなかなか厳しい状況にあり、つくづく継続する難しさを実感したところで、そんな想いを込め、サブタイトルに「不易流行」で観光立国日本を築こう！としているわけです。しかし、有為転変。70の受賞観光地の内、20年後いくつ元気で残っているのでしょうか。



調査の中で異色なのが工芸関係の調査で、何件か手掛けています。最初は1974年の『沖縄北部地域開発構想計画』で、沖縄本島の伝統工芸業を全て調べました。この時の調査には、大学時代に益子で陶芸を習いに行っていたことが役に立ち、壺屋が市街地にあり、松材で釜を焚きますので、その煙が公害ということで読谷村に移ったばかりの壺屋焼金城次郎さん（後に人間国宝）と陶芸談義が出来、金城さんの作品をいくつか買ってきました。縁というのは面白いもので、伝統工芸のことをかじっているということが知られ、今度は石川県の工芸業を調べる仕事が舞い込みました。それが1979～1982年の『伝統工芸と町づくり』で、その1年目に作成した『日本の工芸業・石川の工芸業』は、数年後古本屋で高値が付いているのを見て吃驚しました。2年目からは、当時城内にあった金澤大学の移転を前提として、その跡地に伝統工芸街を造るという構想に取り組みましたが、残念ながら実現には至りませんでした。

そして今度は盛岡市から、市街地にある南部鉄器が、公害で立ち退きを迫られており、かつ後継者もおらず、なんとか再生の道を探したいという調査が舞い込みました。盛岡市内の工芸業を全て見て回り、移転希望者の経営状況等を調べ、市の郊外にある御所湖のほとりに、伝統工芸業の工房団地「盛岡手づくり村」計画を作成しました。1979（昭和54）年から2年間調査し、5年後の1985（昭和60）年に開業しました。年間利用者数は、年

間15万人程度と予測していましたが、1年目は約80万人、2年目には100万人を越す盛況で、現在も50万人近くの人を訪れる施設になっています。山梨県の峡南地方の工芸村の調査も手掛け、こうした経験もあって、観光はいわゆる観光資源に留まらず、地域の総合力を観^{しめ}することという想いが、強く根づくようになりました。

●大きな影響を受けた「住んでよし・訪れたくなるまちづくり」のアプローチ

観光施設やリゾート施設の計画と共に、市町村や広域の観光計画を随分沢山手掛けました。小生がもっとも多くの時間を掛けた、主力業務と言えましょう。観光施設の計画としては、前述した盛岡手づくり村を始め、山形県寒河江市のチェリーランド、山形県南陽市のクアハウス、静岡県相良町のリゾートホテル、徳島県海南町の海南文化村、宮崎県旧南郷村と西米良村の温泉施設他、5箇所のゴルフ場などいろいろ手掛けました。リゾート施設に関しては、バブル期に全国各地の大規模リゾート計画を20数件手掛けました。お陰でリゾートに関しては、随分勉強することが出来ましたが、振り返ってみますと、国民の欧米先進国のような長期に亘るリゾート活動はまったく成熟していませんでしたし、受け入れる地域においてもしっかり根づく計画とは、とても言えません。地方においては、自分達も楽しめる施設として捉えてなく、ただただ経済的な振興装置としての期待だけでした。幸いにして一つも実現しておらず、胸を撫で下ろしています。

市町村の観光計画、いわゆる「観光からのまちづくり」は、小生のライフワークの柱になっており、かなりの件数を手掛けています。この市町村の観光計画を手掛けるにあたって、かなり初期段階に貴重な教訓を得ることができました。

教訓その1です。1974(昭和49)年に沖縄県の調査で、地元に入り込んでまちづくりをされていた方から、「あなた達は、現地に2、3度来ただけで“計画”というのを、カラスの糞のように落とすだけではないですか」と言われたことがありました。効きました。

教訓その2です。(財)地域開発センターのスタッフやその仲間の人たちは、石油ショックの後ぐらい(1975(昭和50)年前後)から、高度経済成長自体の“観光開発＝施設づくり”に替わり、“地域づくり”という形で地元に入っていました。その一つである大洲市との係わり合いの中で、「住んでよし訪れてよし」という概念を最初に生み出したのが彼らです。それまで小生がやっていたのは、研究室や東京の事務所での机上論、いわば空中戦なのに対して、彼らは現場に入っている格闘されていた地上戦です。この「住んでよし訪れてよし」という概念は、ずっと頭に入り、以来使わせていただき、小生なりに普及に努めました。「魅力的な観光地域づくりは、魅力的なふるさとづくりの延長線上にあること。また、そうしませんと住民との交流も楽しめませんし、地域が輝きませんし、なによりも長続きしない」ということを。

1976(昭和51)年に手掛けた『西伊豆町観光計画』は、前述したように『観光・レクリエーション計画論』がきっかけでお手伝いすることになった、小生にとって最初の「観

光からのまちづくり」でしたから、気合いが入りました。出来るだけ西伊豆町に行くようにし、その年だけでなく、しばらくは夏休みの家族旅行は西伊豆町でした。幸いにして計画は好評で、次年度以降も計画に盛り込んだ沿道の修景や、民宿の指導などで仕事が続き、この時に「計画管理」という概念が形成されました。建築設計に、設計図通りに建物が出来るかを見届ける設計監理があるなら、計画だって同様なフォローが必要と考えたわけです。但し、建築設計の場合は建築家サイドの責任で100%監理するのに対して、「観光からのまちづくり」には、地域住民をはじめとして役場や民宿経営者など“先様”がいらっしゃるわけで、一方的に監理するというわけにはいかず、あくまでも計画案に沿って管理というか、いろいろ調整しながら計画案の実現に向けて後押しをしていくわけです。計画管理という言葉は、私が最初に作ったと考えていますが、殆ど普及しておらず、その後も小生1人で使用している状況です。

西伊豆町の計画においても「住んでよし」という考えを堅持しました。西伊豆町では、学校の先生達が「風紀が乱れる」「交通渋滞が起きる」と観光開発に反対し、子供達にもそう教えており、民宿業者等の観光関係者とは一線を画していました。そこで、子どもたち(子どもの純粋さと大人としての感性を併せ持つと言われる小学校6年生)に「将来何をしたいか」「どこに住みたいか」、そして「我が町で自慢したいところ」ということをアンケートで聞き、子どもたちにとって観光開発は「住んでよし訪れたくなるまちづくり」になるという視点から、フォローを続けていきました。こういう手法は、各地の観光計画でも採用しており、宮崎県の綾町や旧南郷村、西米良村などでも使っています。

西伊豆町の観光計画が評判になり、翌年1977(昭和52)年はお隣の旧松崎町の観光計画を手掛け、この町に江戸末期に活躍した左官の名人伊豆の長八の作品が残されていることを聞き、その博物館も提案し、後日「伊豆長八記念館」として日の目を見えています。その翌年が賀茂村、更に翌年土肥町の観光計画も担当しました。この間西伊豆町の計画管理は1978(昭和53)年から1983(昭和58)年まで継続され、これ以降、まちづくりに長く関わる仕事をするようになったというか、長く係わらなくては「観光からのまちづくり」は出来ないと思うようになりました。

市町村単位の観光開発は、山梨県や石川県でもいろいろ手掛けました。山梨県のその一つである早川町の観光基本計画(1983)において、設定した基本コンセプト・キャッチコピー「自然の恵み・人のふれあい;南アルプス邑早川町」は、今も使われています。福島県でも棚倉町(1977)や広野町(1983)でも観光計画をお手伝いしました。棚倉町では計画したスポーツ施設は実現していますが、今どうなっているのでしょうか。元気にやられているといいのですが…。広野町ではミカンの北限であること等を勘案した計



画(右はその表紙)の基本コンセプト・キャッチコピー「東北に春を告げる町・広野町」は、東日本大震災の前まで使用されていました。是非、一日も早く東北だけでなく、全世界に春を告げる町として再興して欲しいと心より願っています。

●大きかった宮崎県との関わり. 故岩切章太郎翁に教わった「大きなソロバン」

市町村単位の観光計画;「観光からのまちづくり」の“最新”というか、今も続いており、多くのことを学ばせていただいたのが宮崎県です。その中で、5つの事例について述べることにします。

その1ー須美江家族旅行村

1977(昭和52)年頃から宮崎県の仕事が多くなり、亜熱帯ベルトパーク調査や須美江家族旅行村計画調査をはじめ、綾町、旧南郷村、西米良村などの「観光からのまちづくり」に計画段階から関わり、計画案の実現やその後の運営にも係わってきました。

宮崎県で最初に観光計画をお手伝いし、かつ実現した案件は、延岡市の須美江家族旅行村です。1979(昭和54)年でした。その3年ほど前に、当時の運輸省の観光レクリエーション室から、名指しで「運輸省が所管している観光施設として、小はユースホテルがあり、大は大規模観光レクリエーション基地があり、その中間規模でフランスにあるような家族旅行村を造りたいので、その原案を作成して欲しい」という依頼がありました。『中規模観光レクリエーション基地総合調査』という名称でした。6,300万人という空前のお客さんが押しかけた「大阪万博(1970)」は、この年を契機にそれまでの団体客から家族連れが旅行形態のトップになり、1970(昭和45)年は“家族旅行元年”になりました。この流れを受けて、家族旅行村が構想されたわけです。

当時の観光レク室は、運輸省からすれば傍流もいいところで、予算もわずかしかなかった。それゆえキャリアであるレクリエーション室長はまだ若くて、「自分が昨年行ったオーストラリアはこうだった」と、個人的体験をやたらと話散らかすだけでしたから、「そうじゃないよ」と思いながら、気合いを入れて原案を作成しました。

この構想に早手を挙げたのが、宮崎県の延岡市でした。今は消滅している(財)日本観光開発財団が発注者になり、原案を作成した小生のところに調査が委託されました。その財団は当然運輸省の外郭団体で、担当された方は現地の状況やプランの中身より、上司に持って帰るお土産ばかり気にしている、典型的な“外郭団体職員”で苦労しましたが、翌年からは宮崎県の発注になり、のびのびやらせていただきました。延岡の市長さんが最初に手を挙げたものの、それだけで決めてはまずいということで、最初の調査は県北全域を調べた上でどこに整備するのが最適であるのかを決める調査で、“最終的(延岡市の意図通り)”に延岡市の須美江海岸を選んだわけです。きれいなビーチがあるところで、それに隣接した形で、コテージやキャンプ場を造ろうという計画を作成しました。

調査経過の基本的な説明は、知事室で行いました。4代前の黒木博知事の時代です。すごく観光に熱心な知事で、全国に先駆けて沿道修景条例も制定しています。担当部長と課長も同席されていて、家族旅行村として提案した内容を説明して、知事さんが「いいね」とかおっしゃられれば、それで決定になるわけです。私は当時30代半ばでしたが、偉そうなことをいろいろ言いました。「運輸省の担当者はよく解っていない、観光に関しては自分の方がよく知っている」と当時は自信満々でした。でも黒木知事は、ずっと私のことを買ってくれました。家族旅行村のプランでも、「県道が民宿と砂浜の間に通っており、子どもが砂浜に出るのに危ないから、県道の位置を民宿の後ろにずらすべきだ」と言ったところ、「なるほど」ということで本当に県道の位置をずらしてくれました。いい観光地をつくるには、リーダーのそれくらいの決断がないとできないと痛感しました。特にこれからの時代は、“引き算”が多くなると思われますから、余計リーダーシップが問われるのではないかと思います。

コテージも中二階にロフトを造ったおしゃれなものにし、キャンプ場も全部板張りのデッキにするという画期的な施設を提案したところ、県はそのまま了解していただき、全部実現することが出来ました(次頁右上参照)。開業後は、1月1日から夏の予約を開始するのですが、1日で予約がいっぱいになるくらい人気が出て、快調に滑り出しました。そうなりますと県からの評価も高くなりますから、次々と仕事の依頼が来て、綾町の仕事にもつながっていきました。



〈故岩切章太郎氏に教わった「大きなソロバン」〉

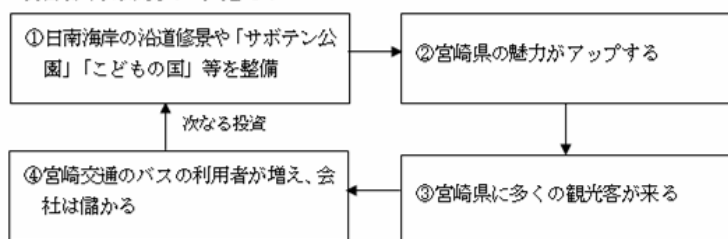
この頃、戦後の宮崎観光の振興を積極的に図り、1972(昭和47)年には全国の新婚旅行の4分の1が宮崎県に来了という、宮崎県をして“新婚旅行のメッカ”に育て上げられた岩切章太郎翁に2度ほどお会い出来ました。今は取り壊された、ご自慢の深いブルーのタイルを貼った宮崎交通の本社社長室で、じっくりお話を伺うことが出来たのは、掛け買いのない思い出であり、小生の宝と言っても過言ではありません。

その中で、2つの話が印象的で、今も覚えています。1つは子どもの国を造った(1936(昭和14)年)直後の話です。まだお客さんのマナーが悪く、歩きながら食べたもの等の紙屑などをポイポイ捨て、園内は大変汚かったそうですが、岩切翁は職員に「お客さんの後をつけ、ゴミを捨てたら直ぐ拾いなさい」と指示したそうです。大勢のお客さんがいましたから、宮崎交通からの職員も動員してゴミを拾いまくったそうです。しばらくしますとゴミがまったく無くなり、「子どもの国はゴミも無く、凄くきれい」という評判になり、そうなりますとお客さんはゴミを捨てなくなったそうです。そして職員の手づくりだったゴミ箱には当然宣伝はありませんし、ベンチも同様でしたから、撮影

した画面に企業の宣伝が入ることを嫌うNHKが、ここを朝ドラの「たまゆら(1965年放映)」の舞台に選び、それでまた大きく飛躍していったわけです。観光地づくりにあっては、「かいた汗だけ大きな花が咲く」という好事例だと思います。

もう1つは、「大きなソロバン」の話です。大局的な視点での経済活動のほうで、大きな利益をもたらすというのです。具体的には、下の図に示したように、魅力的な施設を造れば宮崎県の魅力が増しますから、宮崎県に多くのお客さんが来るようになり、当時はバス利用が中心でしたから、バス会社であった宮崎交通が儲かることになり、その利益を注ぎ込んで次なる施設を造れば更にお客さんが増えるという“好循環”が出来るわけです。このお話を聞いた時は、感動しました。

故岩切章太郎翁の“大きなソロバン”



宮崎県の話ではありませんが、同じような“好循環”の例として、1980年頃だったと思いますが、静岡県観光政策審議会の委員をして知り合ったホテルニュー赤尾の赤尾蔵之介社長から聞いた話です。このホテルは、チェックインを午前10時にし、チェックアウトを午後の2時頃にして「1泊で3日遊べるニュー赤尾」といった宣伝を打ったり、当時は珍しかった社交ダンスの大きなフロアを造り、ドレスを無料で貸し出して宿泊客に喜ばれたり、いろいろ話題を集めるホテルでした。極めつきは料理で、当時としては破格の高原材料率の料理を出し、評判になってお客さんが増えると更に原材料率を上げてお客さんを喜ばせた結果、お客さんが更に増えていったという話です。ところが最近は景気が悪くなりますと原材料率を下げ、当然お客さんには不評ですから次から来なくなり、更に資金がまわらなくなって一段と原材料率を下げ、お客さんが更に減るという“悪循環”に陥り、ついには閉鎖という話も耳にします。観光業は、ふるさとを魅力的にして訪れる人に喜んでいただく商売ですから、何時の時代も「大きなソロバン」を持ち続けることが大事だと思います。

その2—綾町

綾町の仕事は、工芸業がらみで始まりました。綾町には、旧島津藩がらみの竹刀づくりや地元産のカヤを使った碁盤づくりが息づいていた他、芸大出の県職員の元に若い陶芸家や織物家が集まり、ひむか邑同人を形成していました。この工芸業に着目して1981(昭和56)年に、『住んでよし・訪れたくなるまちづくり;綾町の産業観光の将来方向;手づくりの里・綾の発展を目指して』という計画を作成しました。町長は故郷田実さんでした。私が最初に町役場を訪れた時には、町長応接室で昼間から焼酎をご馳走になり、吃驚しました。また当時は自治体でご当地ソングを造ることが流行で、郷田町長ご自慢の綾紬音頭なるレコード盤をもらいました。郷田町長さんはこれまで行ってきた町政に

自信を持たれているようでしたが、その一方で「うちは照葉樹林の面積が多くて田畑の面積が他町村の7掛けぐらいで、森から流れてくる水の温度が低いため、作高も他町村の7掛けぐらいで、“半分($0.7 \times 0.7 = 0.5$)農業のまち」と歎いていました。

しかし、調査している途中で、「照葉樹林はジーン・プール(遺伝子の宝庫)だ」という新聞記事を見つけました。当時アメリカとイギリスは、地球規模で調査を行い、いろいろな動植物の遺伝子の登録合戦をやっていて、「照葉樹林は単位面積あたりの遺伝子が最も多く、きわめて貴重だ」という内容でした。それを郷田町長さんに見せたところ、ころっと見方を変え、照葉樹林の恵みを活かして「照葉樹林都市・綾町」ということで、町づくりが始まりました。照葉樹林を採勝するために、話題づくりも兼ね世界一の歩道吊り橋を造り(右の写真は完成式の郷田町長とのツーショット)、照葉樹林の材で綾城を造り、工芸品の販売と教室のために国際クラフトの城などを造った結果、キャンプ場だけだった町が「観光からのまちづくり」の注目株としてブレイクしていきました。



野菜を直売する「綾・手づくりほんものセンター」は、小生の計画ではありませんで

したが、綾町独自の事情で始まりました。綾町はかつては「夜逃げの町」と言われるくらい貧しかったので奥さんが働きに出ることが多く、そのためどうしても外食率が高くなり、稼いだ給料がそんなに手元に残らなかったため、町で家庭菜園を奨励したわけです。そうしますと、家では食べきれないほどたくさん野菜が収穫できるわけです。その余った分を換金できるように造った直売所が「綾・手づくりほんものセンター」です。農薬を買うお金を節約するために、みんな自分で堆肥をつくり、手間をかけて除草して育てたことが、結果的に有機栽培農法になっていたわけです。ちょうどその頃からアトピーが騒がれるようになり、「綾町の野菜は有機農法で育てた野菜」ということで、アトピーに苦しむ宮崎市内の人たちが買い出しに来始め、これも大ブレイクしました。

これからは国際化の時代ということで、町の中学校にアメリカ人の先生を招聘する提案も直ぐ実現しました。知り合いのアイビーリーグの教授にお願いしたところ、一番優秀な人を送り込んできました。しかし、郷田町長は自宅を下宿にし、娘さんの英語の教師もやらせたようで、「話が違う」とその学生は半年ぐらいで帰国してしまいました。ここあたりから町長さんとの蜜月は終わりを告げ、以降まったく綾町から離れてしまいました。しかし、綾町の評判はかなり高くなり、町長さんは講演に呼ばれることが多くなり、先々で「全て私が考え、苦勞して実現させてきました」といった話をされているようで、おやおやと思った次第です。結果的に最後は、引きずり下ろされるような格好で町長をお辞めになり、舞い上がることの恐ろしさを知りました。

その3－南郷村

綾町の成功を受けて、宮崎県から「南郷村に『百済の里』というコンセプトで村づくりをしたい村長さんがいるが、具体的にどうしていいかわからないので指導して欲しい」と言われ、1987(昭和62)年に県から南郷村に派遣されました。百済の里というのは、南郷村に、白村江の戦い(663)に敗れて日本に亡命してきた百済王族の一人、禎嘉王が逃れてきたという伝説があり、これを活かした村おこしをしたいと、前年に村長に当選された田原正人村長さんが思いついてのものです。

この村には何点かの銅鏡が残されており、その一つが奈良正倉院にある御物と同じ時代で、同等の価値を持つ貴重なものだということがわかったわけです。村長さんに「この銅鏡を文化財としてしまい込み、研究用として使うのか、観光的に活用するのか」と問うたところ、即座に「観光的に活用したい」と。



それならばということで、人を惹き付けるために、銅鏡を収める施設を奈良の正倉院と同じものにして、「西の正倉院」を創ろうと提案したわけです。2月に指導に行って、その年の8月には計画ができあがりました。基本コンセプトは、「百済との1300年におよぶ交流を今に活かした;西の正倉院・百済の里・南郷」とし、南郷村の文化と百済の文化が織りなすまちづくりをしようという計画です。計画で提案した案は、父子が年に一度再会する師走祭りに因み、小高い丘に百済の首都扶余にある四阿と同じものを再現した恋人の丘を初めとして、地元料理を出す茅葺きの南郷茶屋、韓国料理を出す丹青を施した百済の館、南郷と百済関係の小さな店が連なる百済小路、そして“中締め”となる西の正倉院など殆どが実現しました(右の写真)。ただし、百済の館は素晴らしくきれいに出来すぎ、焼き肉屋にするにはもったいないということで、百済関連の資料館に変更されましたが…。

ともあれ一時は宮崎県下で一番元気になる、以前は自分の村を紹介するのに、「日向市の西にある村」と言っていたのが、「百済の里の南郷村」で通じるようになり、過疎問題の解消にはまず「心の過疎」の解消から始めるべきで、それには観光がお役に立てるということを実感しました。また、村長さんは「こんな不便なところに観光客は来てくれるのだろうか」と心配していましたが、国民の旅行体験もかなり積み重ねてきましたから、「行きやすいところでなくとも、行ってみたいところを創れば必ずお客さんは来る」と説得し、大勢のお客さんが来てくれて小生もホッとしました。この考えは、更に強まり、後述する熊本県境の山の中にある西米良村でも、立地条件については何も心配していませんでした。

村長さんは温厚な人格者でしたが、その下で仕切っていた課長さんが段々有頂天になり(?)、一人で講演に出かけ、その結果を課員のいる前で得々と話したり、メディアや視察に来た人の応対も一手に引き受けるようになり、小生からあれこれ指導されるのが嫌になってきたのでしょう。小生との契約が切れ、独自に採用した支配人と基本コンセプト

トから逸脱した施設を造り始めました。例えば、南郷茶屋はどういう訳か山形風の蒔蒔屋敷に替わりました。そのうち村長さんが変わると、新村長さんは百済の里にはあまり係わらず、別方向のコンセプト(があったのか、無かったのか)で、林業関係の補助事業を利用して“鄙にも稀”な贅沢な宿泊施設を整備し、最初のコンセプトから益々離れていってしまいました。施設は維持費がかかりますから、手を掛けなくなると直ぐにダメになります。茅葺きの南郷茶屋もまったく手入れをしなくなりましたから雨漏りがするようになり、それでトタンを吹いたのですが、益々魅力が低下し、ついに閉店です。贅沢な宿泊施設も同様です。

それに“トドメ”を差したのが、2006(平成18)年の東郷町、西郷町との合体です。新しい町名は美郷町で、当然「百済の里・南郷」という看板は使えませんし、また新しい町としてはそれだけに係わってられませんので、一部の施設は見るも無惨な姿をさらしています。このままの状態を晒し続けるのは、なんとも悲しく、かつ残念で、県にもその再興を促すよう再三働きかけていますが、「まずは美郷町の意向が先」というわけで、動き出してはいません。行政単独のまちづくりの限界と陥穽を痛感しています。そして思います。観光からのまちづくりにとって“合併は天敵”以外何者でもなく、集落単位で、出来るだけ自分達の手で頑張ることが大事だと。

その4ー西米良村

西米良村の仕事も、やはり宮崎県の主導でした。1993(平成5)年に、県下で人口が最も少ない3町村をモデルに、一次産業と二次産業、三次産業全てを有機的に連係して地域振興を図ろうと『第六次産業育成モデル研究調査』が行われ、これを担当して西米良村を訪れたのが最初でした。

モデルとして取り上げた3町村(諸塚村、日之影町、西米良村)の中で人口が一番少ないのが西米良村で、熊本県の県境にあって、96%が山林の村です。人口は最初に行った時は約1,500人でした。高度経済成長期は林業がよかったこともあり、ピーク時には7千人ぐらいの人が住んでいたそうです。木材が売れ、まだ外材を入れていませんでしたからどんどん伐採して杉を植えていました。全国何処もそうで、それが花粉症の蔓延に繋がっていきました。しかし、木材価格の高騰を受け、1964(昭和39)年に外材輸入が自由化され、合板技術も格段と進歩した結果、国産材は急速に値下がりし、林業が段々立ちゆかなくなりました。そして副業のシイタケも最初は儲かっていましたが、中国産が入って価格が暴落し、これも衰退していき、ダム整備もあって少子過疎化の象徴みたいに、村の人口は減少してしまいました。こうした状況の中で、県の調査が行われたわけです。



当時の故濱砂五朗村長さんは、綾町や南郷村の取り組みを知っており、『第六次産業育成モデル研究調査』の報告書を読まれ、幹部職員に私にしばらく任せようと明言されたそうです。そして次の年に、西米良村で『総合産業フィージビリティ調査』を行い、その次の年に村おこしの計画『生涯現役元気村;カリコボーズの休暇村・米良の庄』が出来ました(前頁右下の図は一連の3つの報告書の表紙)。米良の庄というのは、村内にある8つの集落ごとに振興を図るという意味です。前述したように、南郷村を手掛けていた頃から強力なコミュニティが形成されている集落単位で、「自分達のふるさと自分達で守る」という計画が、「持続する地域振興の鍵」と思うようになっていましたから、西米良村では最初からその考えを前面に出したわけです。それと共に“観光は総合文化・産業”という考えがありましたから、村のたたずまいづくりとか、文化の振興も視野に入れており、小川集落に民話が多く伝承されていたからここを「民話の庄」とし、まず語り部の育成事業から始めました。村おこしがスタートして2年目の1996(平成8)年でした。また、同じ年に越野尾地区に、湖の駅も出来ました。

花卉産業などの産業振興も提案し、天包山の花弁団地の観光化も含めた拡充計画も作成しています。当時村で主流になりつつあったのが、ゆずやパンジー等の花卉栽培で、どちらも収穫期に作業が集中します。例えばパンジーの場合、発芽した苗を一斉に鉢植えする作業があり、ゆずも重いので、高齢の方にはきつい仕事で、人手不足が深刻になってきました。新しい産業興しの前に、とにかく今ある産業のことを何とか支えよう、人手が足りないならばそれを補完する仕組みを考えようと提案したのが、日本型のワーキングホリデーです。これは、パンジーの鉢上げや柚子の収穫を手伝っていただき、その一日の給与以内で村営のキャンプ場のバンガローなどに泊まれるようにしたものです。バンガローの料金変更には、一部条例を変える必要がありましたが、「よし、わかった」と村長が決断し、地元の若い人たちの青年部会長やゆず部会長さんが「面白い、やってみようじゃないか」と、取り組みがスタートしました。その記事を、今は宮崎日日新聞の編集局次長になっている田代学さん(当時は高鍋支局長)が、宮崎日日新聞の一面に記事を載せてくれました。それからすぐに朝日新聞が追随して西日本版の一面に記事を載せて一躍有名になり、北は北海道、南は沖縄から予想以上にお客さんが来るようになり、西米良村は一躍全国に名前が知られるようになりました。1997(平成9)年でした。

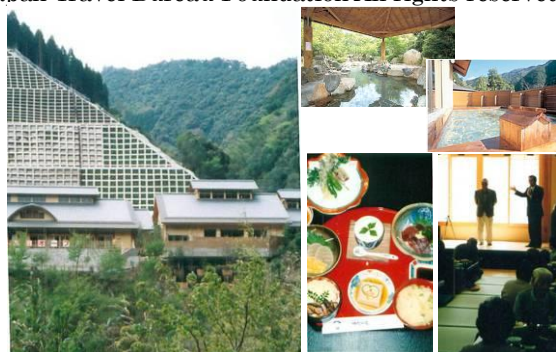
現在村の主力観光施設になっている村営の温泉施設「ゆた〜と」が、村の中心地区である村所集落に整備されたのが1999(平成11)年です。この整備にあたっては、建物の計画だけでなく、料金設定とかレストランの料理メニューまでを含むソフト設計も行っています。重点を置いたのが、料理と館内の清掃です。料理に関しては、宮崎の一番有名な料亭の亭主森松平さんに頼んでメニューを作ってもらいました。「一番高くても1,200円までで、できるだけ500円くらいの安いメニューも作って欲しい」といろいろ注文を出すわけです。器も地元の宮崎の焼き物を使うことにしました(右の写真)。清掃はまずト

イレの掃除をこまめに行うようにし、トイレも含めて館内にスタッフの家で採れた花を飾るように提案し、これは開業以来今も続いています。

そしてコスト削減も兼ね、業者に委託すればお金の掛かる風呂の清掃を、地元の人たちに朝やってもらう「朝風呂会」も提案しました。西米良村のような過疎の村は、皆さん何かと忙しく、「そんなことやる人がおられるじゃろか?」と首を傾げる人が多かったのですが、ここでも村長さんが「やろう!、誰もやらなければ俺一人でもやる」と言われ、スタートしました。結果的に首を傾げた黒木敬介総務企画課長さんは夫婦で参加され、早15年になりました(右の写真、左側のお二人が黒木敬介さん夫妻)。こうした頑張りによって「ゆた〜と」は、予測を超えるお客さんが早朝と称して、今も村一番の賑わいどころになっています。

西米良村においてかつてお城があり、田畑も多く、一番賑わっていたのが小川集落です。その結果、大学進学率が高かったため、村に戻ってくる子弟が殆ど無く、役場のある村所集落に取って代わられたわけです。しかし、住民のプライドは高く、村所地区の賑わいを見て、自分達もなんとかしようと考え、山梨県早川町の「南アルプス山菜祭り」をモデルにして2000(平成12)年、「カリコボーズの山菜祭り」を始めました。最初は半信半疑だった住民もお客さんが900人も集まり、約100万円の売り上げもありましたから、「来年もやりたい」という声上がり、今年で早15回目を迎えています。

そして年間を通して集客と雇用の場づくりを5年以上も提案し続け、ようやく2009年おがわ作小屋村が整備されました。茅葺き屋根の食事処と交流棟、豆腐等の加工所からなるミニテーマパークです(右の写真)。ここを出した、16個の小皿に郷土料理を盛りつけた「小川四季御膳」が大当たりをして、平日でもこれを食べにお客さんが来るようになりました。この小川四季御膳に刺激され、プロの料理人が居る「ゆた〜と」の料理も一段と改善され、いい意味での“集落間競争”が活潑になってきたのは、なんとも素晴らしいことだと考えています。翌年の2010(平成22)年、より強力な集客装置として福島の花見山をモデルにして、小川花見山づくりが始まりました。小川地区の住民約100人の半分以上の人が参加して、花木を植えていこうというものです。今年の3月で、早5回目の植樹祭を行い、ポツポツ花が咲くようになり、後10年も続ければこれを見るのを目的としたお客さんも出てくるのではないかと思います。



西米良村に関しては、小生がこれまでの「観光からのまちづくり」の経験と、見聞してきた全国各地や海外の事例全てを網羅し、適宜紹介すると共に、それに学んだアイデアや新しい提案・計画づくりをしてきました。そしてそれを記録すると共にフォローするために、西伊豆町で始めた「計画管理」の一環として、それらを適宜『西米良村観光応援歌』という形で村に送り、関係者に転送してもらうやり方を採用しています。年度末にそれを一冊に纏める作業も8年目になりました。

黒木村長さんはあれこれうるさいことを言わない人で、小生が提案した計画・アイデアの意図するところを的確に汲み取る他、ご自身で村有林を活用した、希望する75歳以上に方全てを2泊3日で東京等にお連れした「平成の東京見物」等の施策も発案・実施され、大評判になりました。こうして西米良村は大層元気になり、目下宮崎県下で“最も注目を集める村”となっています。しかし、南郷村の例もありますから、当初の理念・方針をしっかり堅持しつつ、常に新しい魅力を付加し続けることを提案しているところです。

西米良村との係わりは今年で21年目になりました。これほど長く続いたのは、黒木村長さんの理解に寄るところが大ですが、私はおべんちゃらを言いませんから、途中で切れたところも多々ありますから、やはり相性がよかったという点が大きかったと思います。『西米良村観光応援歌』を読まれ、「そこまで言うか」と思われたり、カチンとくるケースも多々あったように聞いていますが、何のためにやるか、その目的を共有していることが肝要で、それが持続する肝ではないかと考えています。

その5-宮崎県県南地域

2005(平成17)年から2009(平成21)年の5カ年にわたってお手伝いした宮崎県県南地域観光再興計画調査も強く印象に残る仕事で、いろいろなことを学びました。この計画は、日南市と串間市、旧北郷町、旧南郷町(いずれも合併して現日南市)の観光の再興を図ろうというものです。本地域の海岸線は日南海岸ですが、かつて新婚旅行のメッカの一角を担ってきた面影は全くなく、バブル経済崩壊後の長引く観光不況によって観光客が減りつつある観光地をどのように再興するかが課題でした。

新しい観光地を創ることも決して簡単ではありませんが、一旦傾いた観光地を再興するのは容易ではなく、時間を掛けて取り組むことが不可欠ですから、5カ年の取り組みになったわけです。そして再興のために3つの柱を立てました。ア.人材の育成とイ.地区・地域の連携・ネットワークの形成、ウ.情報の一元的発信です。

ア.人材の育成については、かつて飢肥藩にあった藩校「振徳塾」を今に復活し、「観光からのまちづくり」を担う人材育成を図ると共に、学童を対象に「観光教育」を始めることを提案しました。前者の「振徳塾」は2007(平成19)年から始まり、小生の担当が終わってからも継続され、そこで聴講した生徒の一人がいたくまちづくりに発奮し、なんと2013(平成25)年に実施された日南市長選に立候補して当選された崎田恭平さんです。34歳という若さで、当選後も矢継ぎ早に大胆な政策を実施しています。「振徳塾」の望外の成果と言えましょう。

学童を対象に「観光教育」については、『カリブ観光読本(後掲40頁参照)』に刺激を受け、当時の商工労働部長の中馬章一氏に「宮崎版観光読本」の制作を具申したところ直ちに実行



されて、2004(平成16)年5月に我が国最初の『観光副読本;わたしたちができることってなあに?』が出来ました(右上参照)。県も手応えを感じたのか、なんと約17万部を作成して小学校高学年から中学生の全員に配布しています。

それを読まれ、県の教育委員から油津中学校の校長に就任された方が、中学2年生を対象にまずふるさとの歴史と観光的な魅力を勉強した後、それを修学旅行先の京都駅前で「僕ら観光隊」という活動を行いました(右の写真上段)。NHKでも取り上げられ、かつ地元の放送局でも特別番組が制作され、県内に大きな好インパクトを与えました。

これに刺激を受けたのが日南市の鵜戸中学校の校長先生に就任された柿木先生です。先生はまったく経験が無いにもかかわらず、サーフィンの用具を一式買いそろえ、



なんと体育の時間に学校の目の前の海で子供達にサーフィンをさせたのです(前頁写真下段左)。子供達は大喜びで、それから今日はサーフィンが出来るかどうかを確かめるため、毎日海を見るようになり、季節によって海の色が変わることも“発見”しています。素晴らしいことで、これこそ観光教育が狙うところだと思いました。このニュースが県外に放映されたらしく、県外から「鶴戸中学に入学するにはどうしたらいいか」という問い合わせがあったそうです。そして翌年は、南郷中学校の課外事業でシーカヤックの活動が始まり(前頁写真下段右参照)、一躍宮崎県は「観光教育」の先進県に躍り出ました。

しかし、学校の活動は校長先生の意向が強く反映されるため、校長先生によっては学童を観光の宣伝に使うが如くの「僕ら観光隊」の活動を積極的に支持されない方もおられるようで、宮崎県の「観光教育」は一気に拡充というわけにはいかず、その後は一進一退の状況のようです。しかし、学童に対する「観光教育」に関して、しっかりとした種を蒔くことは出来き、小生的には“画期的な成果”と嬉しく思っています。

イ.地区・地域の連携・ネットワークの形成については、いろいろなケースがあります。同一地区でのケースとして、飫肥地区において城跡や武家屋敷等のある歴史文化財地区には観光客が来ますが、少々離れたところにある商店街はまったく観光客が来なかったため、それらを結ぶべく「食べ歩き・まちあるき」という仕組みを提案しました。すぐには動かず、提案後2年ぐらいいして先進地の郡上八幡市の「食べ歩き」を視察に行き、一気に実現に向かいました。最初は歴史地区の有料施設の入場券と1箇所100円の買い物券が5枚付いて1,000円で販売していましたが、「食べ歩き・まちあるき」の人气が高まり、それを目的に来る人も出始めるようになりました。そしてこの“成功体験”が、日南市の油津港がカツオの一本釣り漁の日本一であることに着目した「カツオの一本釣り炙り重」という新しい郷土料理を産み出し、「観光からのまちづくり」が、少しずつですが広がりを見せています。

ウ.情報の一元的発信については、調査の事務局を勤めてくれた日南商工会議所の若い職員が、ホームページでいっちょがネットを開き、これまた地道にアクセス数を増やして行きました。

●「観光計画」に関する著作。基本は「経験してきたことを書く」

前述しましたように『観光・レクリエーション計画論』1975は、“空軍的”仕事から“陸軍的”仕事への大きな転換点になった著作ですが、1974(昭和49)年1月に(財)日本交通公社から出版された『シンポジウム余暇社会の旅』という本を作るお手伝いしたのも、良い経験でした。出版の音頭をとったのは、記憶が正しければ(以下は全て同様です)、(財)日本交通公社の原重一さんで、総合監修は鈴木忠義先生でした。本は、二部構成になっており、第一部の「シンポジウム;人間にとって観光・レクリエーションとは何か」に参加する先生方の人選は、主に渡辺貴介さんと小生の意見を通していただいたように記憶しています。当時こういう観光の本を書く人が皆無でしたので、まず鈴木先生を核

にして、黒澤明監督の『七人の侍』という映画になぞらえ、当時小生と同じマンションに住んでおり、食べ物の残留農薬等の理由でやたらと短命説を唱えていた西丸震哉氏や『日本沈没』を書かれた小松左京氏、社会文学者の米山俊直氏、「ローマクラブの報告書」の執筆者の1人だった茅陽一氏など気鋭の7名の方に、大まかな粗筋だけで、自由に喋っていただきました。大変面白い話が沢山聞けて、勉強になりました。印象に残っているのは、旅行の原点に関連して、米山俊直氏がアフリカのある種族では、一定の歳になった若者は群れを離れる「テンベア」という本能的活動がおこなわれている、といった話です。自分も若いときはそうだったと思う一方で、今の若い人には当てはまらなくなってきたかな(?)と思っています。

第二部の「観光レクリエーション試論」は、渡辺貴介さんが基本的な概念整理をし、フローチャートや数字、模式図を小生が担当し、文章は分担執筆しました。この部分の校正をされたのが、当時『るるぶ』の編集長をされていた伊崎恭子女史で、我々の拙い文章を読まれ、「この程度なら1ヶ月新聞を読めば書ける」と酷評されました。“我々は観光計画の先頭集団”と浮かれていましたから、鉄槌をくらった思いがしました。これで鍛えられたおかげで、慎重に文章を書くようになりましたが…。

上記以外の、いわゆる出版された主な本としては、以下の5冊で、あまり多くはありません。

『観光・リゾート計画論』総合ユニコム 1992

『AERA Mook 観光学がわかる』共著、朝日新聞社 2002

『西米良村の挑戦』鉾脈杜 2004

『観光実務ハンドブック』共著、丸善 2007

『リーダーが語る日本観光の行方』共著、現代旅行研究所 2009

いずれも計画論か、計画を実践してきた記録書です。『観光・リゾート計画論』は、小生初の単独著者の出版で、まだ計画した大規模リゾートが一つも実現していない中で、こういうリゾート計画をしたいという願望的な計画論です。結果的に計画した大規模リゾートが一つも実現していないということは、まだまだ“甘い”計画論だったと言えます。それ以外の本は主に「観光からのまちづくり」をテーマにしており、全て自分が係わった事例を元にして書いています。

いわゆる出版はしていませんが、私版の著作としては、小生が雑誌や講演等で話したことが文字になっているのを集めた『人の集まるまちづくり;観光プランナーとしての25年間の著作集』を1992(平成4)年に制作しています(右の右がその表紙)。1965(昭和40)年から1990(平成2)年分のもので、87件を収録しています。人はどう思われるか解りませんが、自分的には何かと役に立つ代物です。特に昔の記憶が定かではなくなってきた昨今は、大層重宝しています。本格的に自分史を書くことになった場合、必携書だと思っていますが、書くときが来るかどうかです。その続編が2003(平成15)年に制作した『観光からのまちづくり;観光プランナーとしての「第2ステージ」12年間の著作集』で、1991(平成3)年から2002(平成14)年分のもので、55件を収録しています(右上の左がその表紙)。これはバブル経済期のリゾートブームの時と重なっており、そうした原稿が多くなっています。当然の如く、「リゾートは必要」という立場をとっていますが、一度も別荘を持つことなく終わりそうで、“有言不実行”のそしりを免れないでしょうねえ…。2003(平成15)年から2012(平成24)年までのものもまとめている最中ですが、資料整理の悪さと引っ越しのため、混乱を收拾するのに今しばらく時間がかかりそうです。

2003(平成15)年から自分でワープロを打つようになり、コラムを書くようになりました。その一部は弊社のホームページに掲載してきましたが、昨年一念発起して124編のコラムとその後日談をまとめ、430頁に及ぶものを作成しています(右はその表紙)。ただ、編集の関係で余白が出来た項に「後日談」を書くようにしており、その後日談が未完成のところもあるため、まだ製本はしていません。

未完成と言えば、25年以上前から書き始めてきた、観光地域計画をする際の要点等を100編まとめようとした『人の集まるまちづくり;観光地域計画語録100』です。当初はただ『観光語録』として悦に入っていたのですが、若いときは何かと忙しく、歳をとってきますと取り上げた語録の中には、賞味期限が切れたようなものもあり、筆が止まっています。しかし、サブタイトル「地球規模の温故知新で観光立国を!」と大きくふりかぶっていますから、古いことや多少音痴の話でも、反面教師になるかもしれないと、まだ温めています。後述するように『観光黒書』と、宮崎県での観光体験録をまとめようとしている『宮崎観光開発軌跡管見;昭和・平成;宮崎観光の来し方・行く末「ほほえみ花の国・宮崎」賛歌』をまとめたら、また『観光地域計画語録100』に戻ろうかと考えています。



●言いたいことを言ってきた講演と教育

〈講演〉

講演はいろいろやってきました。社会人になって10年ぐらいしてからお声がかかるようになり、バブル期が少々多いぐらいで、大体年間20〜30件ぐらいでした(右はごく初期の写真。左から2番目が小生。右端が当時の松崎町長、その隣が修善寺町長)。この講演活動は、観光地をより多く見聞きする上で非常に役立ちました。小生の講演は、事前にかなり詳細なレジュメを作成し、それに基づいて話すようにしています。パワーポイントが使えるようになってからは、パワーポイントが主になりましたが、作成にあたって当該観光地の出来るだけ詳細な資料を戴きましたし、講演の前には現地を見させていただくようにしていましたから、多くの観光地をかなり詳しく知ることができるようになったというわけです。しかし、その結果、本業の調査と併せて年間の出張回数は、ピーク時は150日を超える年が続き、100日以上が20年ぐらい続きましたから、家庭を顧みる時間は殆ど無く、3人の子供達の入学式や卒業式を始め、学校には一切行ったことがなく、きわめて異常なワーク・アンバランスでした。



講演の内容は、小生としては“辛口”とは思っていませんが、話の流れで引用した事例の中には、言ってみれば“反面教師”的なことを重要視していたこともあり、小生的に是々非々をはっきりさせた話をしてきました。今から30年ぐらい前に、山梨県で講演した時、まだ賑わっていた清里のペンション群があまりに“若い”ため、いずれ観光客が旅行体験を重ねるにつれ目が肥えてきますから、「清里は危ない」と話してびっくりされ、今でもそのことを言われます。長く同じことをやっていると「時の流れ」というか、旅行者の目の肥えに伴う“盛衰”を実体験しますから、少し見えることがあります。その点では経済高度成長期とバブル経済という2つの“山”とその後の“谷”を経験したということは、結果的になかなか得がたい経験だったかなと思っています。

また、宮崎県では35年以上係わってきましたから、観光課に居続けることが出来ない県職員より宮崎県の観光の盛衰を知っており、2013(平成25)年に宮崎県の宮崎空港ビルから講演の依頼があった時、そうした長年の経験と宮崎県の思いの丈を思いっきり述べようと張り切りました。その結果、作成したパワーポイントはきわめて“長編”になり、案の定時間オーバーとなり、肝心の“結論(私説将来ビジョン)”をしっかりと語ることが出来ませんでした。歳(衰え)を痛感しました。歳をとると話が長くなり、コンパクトにまとめることが難しくなります。しかし、悔しかったため、更に言いたいことをほぼ全て追加した“超長編”のパワーポイントを作成し、依頼主と宮崎県観光推進課に送信しました。ただ“拾う神”がいらっしゃったようで、さる大手企業の社長さんが「あれだけ

宮崎県の観光を考えている方は珍しい」と話され、後日西米良村に視察に来られた、という話を聞いた時、嬉しかったですねえ〜。

〈教育〉

教育の経験は、自分間活動の中では、時間的には多くありません。立教大学で渡辺貴介さんからバトンタッチして非常勤講師をしたことがあります。期末にレポートを出す形式の授業にしたわけですが、あまりひどいものには赤点を付けていましたら、「難しい講義なので、大学院が出来たときに又お願いします」と言われ、あっさり2年ほどで首になりました。その後、母校で「造園学特論」ということで、学部で4年、大学院で20年非常勤講師をしたことがありました。この経験は小生にとって頭を整理する上で、大層勉強になりました。一週間に一度のペースで半年間ですから、大体15回の講義になり、それに則した講義用の教本がそれなりに出来ましたが、学部用は少々理屈っぽいものになっています。

その後、長崎国際大学の非常勤講師になり、夏の集中講義を8年ほど行いました。東大の経験で作成した教本をベースに話したわけですが、聞く学生にとっては“超難解”だったようでした。なにしろ大学で初めて観光計画に触れ、かつそれが実践的なものばかりでしたから、理解するのが大変だったと思います。同じく集中講義で多くの学生を集めていた講師の講義に、アメリカのレジャー論とかいった内容だったと思いますが、講師の方が「私アメリカにいったことが無く(?)、ディズニーも見たことがないのです」と、正直に告白された時は、のけぞったことがありました。

(2) 観光分野での業績や功績

●観光プランナーとして「実現すること」を前提として取り組んできたこと

改めて「観光分野での業績や功績」と言われますと、怯んでしまいます。前述したような観光調査や計画の総数は、延べ約400件に及びます。それを大別しますと、前述したように「観光調査・研究」「観光計画の作成・実現までのプロデュースとその後のフォロー」「観光計画書の執筆」「講演・教育」になり、「観光調査・研究」と「観光計画書の執筆」は、書物として残されています。これが業績になるか解りませんが、批判的に読まれるにしろ「こういう考えもあったのか」と見ていただければと思います。

小生のメインテーマである観光計画の総数は、複数年に係わるものも含めると、観光施設86件、観光地区89件、まちづくり103件、広域観光計画61件と、300件近くになります。実に多くの観光計画を手がけさせていただいたと感謝していますが、観光プランナーとして常に「実現すること」を念頭に取り組んできたものの、実現したのは1割くらいでしょうか。その中で小生にとって一番の“優等生”は、1985(昭和60)年に開業し、現在も約50万人ぐらいの人が訪れている「盛岡手づくり村」でしょうか。開業したものの、現在では苦戦しているところも少なくないのではと、心を痛めています。

「観光からのまちづくり」の場合は、一つの町の計画がずっと続いているケースが多く、最初の西伊豆町(1976)も5、6年係わっていました。また、長く係わらなくては、同じコンセプトを堅持しながらの「観光からのまちづくり」は出来ないと思います。西伊豆町にあっては、「花と潮騒のまちづくり」を基本コンセプトとして、「既存観光施設の梔子入れ」や「民宿の育成」、「沿道の修景」を提案し、その後押しを数年やってきました。「沿道の修景」については、コンクリートの吹きつけ法面を隠す沿道修景は今も残っていますが、手入れは充分でないようです。

「既存観光施設の梔子入れ」に関しては、国道にへばりつくような臨海型の大型ホテルや旅館の環境改善を図るべく、バイパス案を提案しました。しかし、当時はホテルの玄関のところで、旗を振りながらお客さんをお呼び込む「客引き」が盛んに行われており、それがそれなりに効果もあったようで、とても耳を貸してくれるような状況ではありませんでした。主力観光施設だった洋らんセンターや東急が運営していた堂ヶ島レストルの改善策は、容易ではありませんでしたが、洋らんセンターはより中心地区に移転し、小生とは違う方のプランで「らんの里・堂ヶ島」が整備されました。それと共に、伊豆でランを実生から育てますと5年かかるそうですが、沖縄なら3年半に短縮出来るということで、沖縄に分園を整備しました。伊豆から沖縄にしばしば通われるのはあまり賛成ではありませんでしたが、当時内田熊一園長さんは脂の乗りきった時で、楽しそうに沖縄通いをしていました。しかし、伊豆の施設整備と沖縄の分園整備で約27億円の借金をすることになり、押印してきた日でしたでしょうか、「前田さん、27億円の借金、こわいぞー!」と言っていたのが耳に残っています。そしてバブル経済崩壊の観光不況によって伊豆の観光客は急速に減少していきました。しかし、円高もあり、アジアを中心とした海外旅行は伸びて続けており、お客さんの目がどんどん肥えていき、従来型の見せ物のような伊豆の観光施設は飽きられるようになり、らんの里・堂ヶ島は2005(平成17)年に倒産してしまいました。伊豆半島の観光的な盛衰は、我が国の観光地の盛衰を先取りしたような格好で「衰退状況」を呈しています。現在、伊豆半島は倒産と閉鎖したままの観光施設が多く残されているため、“廃屋半島”と呼ばれており、まだ新しい展望が見えていないようで、全国の観光地もいましばらくは、再興に向け、もがき続けるのではないかと思います。

山梨県の「観光からのまちづくり」の第1号は、前述したように早川町で、5、6年係わりのなかで、道の駅のハシリである「南アプラザ」「南アルプス白籬史朗山岳写真館(右の写真)」「ビラ雨畑」「やまめピア」「紅葉とそば祭り」等が実現しました。その後は手を離れ、町は上流圏構想とやらのコンセプトで町おこしを図っていったようで、手を離れても送られてくる町の広報誌を見ても、何をされたいのかよく解りません。2014(平成26)年の5月に約30年



ぶりで「南アルプス山菜祭りを」見に行き、当時から今も町長をされている辻一幸町長さんにお会いしました。町長さんは、「約30年前に作っていただいた計画に基づいて今もやっています」と話されましたが、「南アプラザ」を除いて観光的にはかなり以前の活気が失われているようにお見受けしました。山梨県内でお手伝いしたところは、その後殆ど観ていませんが、同じような状況なのではないかと推察していますが…。

「観光からのまちづくり」も、持続・継続が肝要だとしても、時代は変わり、利用者の志向も変化・成熟していきますから、「旬」があることは避けられません。それにどう対応して、次なる再興を図るかが、今、大きな課題ではないかと思います。それを一人のプランナーが継続的にフォローすることは、殆ど不可能でしょうから、どれだけ将来的にも残る基礎的なところを、初期段階に固めるかがポイントではないかと思います。その際の基本的な考えは、「不易流行」ではないかと思います。

この不易流行というのは、俳聖松尾芭蕉が「奥の細道」の旅の中で会得した俳譜の理論で、「不易を知らざれば基立ちがたく、流行を知らざれば風新たならず」というものです。小生は、これを「不易＝基礎をしっかりと固め、その上で適宜流行を取り入れることが肝要」と理解しています。各種先進事例や流行をみて直ぐ飛びつき、流行が去ったときには何も残っていないことを多くみてきましたから、まずもってその地域の「不易」の良さをしっかりと捉え、それを活かすことが基本になると考えています。「観光からのまちづくり」をする上で、不易とはその地域の自然、歴史、そして生活を含めた文化と考えています。西伊豆町にあっては、海の眺望と鰹漁業、花卉栽培等が「不易」と考えていましたし、早川町に関しては南アルプスの恵みこそが不易と考えていました。

西伊豆町における「民宿の育成」に関しては、1971(昭和46)年に草津にペンションの第1号が生まれ、すくさま清里高原等でペンションが次々に整備されていき、民宿のお客さんがペンションに流れ始めていた時期で、どうやったら民宿らしさが活かされるかを模索しつつ、『西伊豆民宿通信』という形で改善案を提案していききました。しかし、襖で仕切られた部屋にはプライバシーがありませんでしたし、トイレも和式でしたので、お客さんの「普段の生活水準」が日々向上している中で、旧態然とした民宿のハードウェアは致命的で、衰退を食い止めることは出来ませんでした。聞くところによれば、現在西伊豆町の民宿は昔からの顧客や釣り客が利用しているほんの数軒とのこと。諸行無常ですが、我が国の観光地において、ハード面でどのように時代に対応してリニューアルしていくかが最大の課題と思います。

その対応策は難しいところですが、これまでの反省を含めて、これからはリニューアルが可能なように、余裕を持った「三圃式開発」が一策ではないかと考えています。これは「三圃式農業」という農業用語をもじったもので、もともとは土地を三分割し、冬穀・夏穀と休耕地(放牧地)に分けてローテーションするという、土地が痩せていたローマ時代の北ヨーロッパで生まれた知恵です。我が国の温泉地は、敷地目一杯に建物を建て、

それが最盛期には“温泉街”となり、それなりに風情を生みましたが、建て替え時期に来ますと動きが取れず、現在のように廃業等が相次ぎますと、閉鎖した旅館が点在したり、取り壊して歯が抜けたようになり、なんとも無様な状態です。これからは、先を見通すことが極めて大事だと思います。

宮崎県における「観光からのまちづくり」については、前出したように西米良村とのつきあいは1993(平成5)年から今も続いていますから、21年間という長きにわたります。計画を作成し、それが実現し始め、お客さんが来るようになった時点ではそれなりに地域振興に貢献出来たと言えるかもしれませんが、小生の手を離れ、旧南郷村のように今では閑散としている状態になっている場合には、評価は変わってくると思います。問題は「観光からのまちづくり」が当初の基本理念や基本方針をしっかりと継続し、集落が維持できるだけ若者の雇用の場が創り出せるかだと考えています。後述するように、西米良村の「観光からのまちづくり」は、正念場にさしかかってきていると考えています。つまり、業績としての評価は、後世の仕事になるのではないのでしょうか。

●20年にわたる西米良村の取り組みを通じて

再三述べているように、西米良村の「観光からのまちづくり」のおつきあいは、20年以上経ち、今なお継続中で、大袈裟に言えば、小生の経験と現在の時間のほぼ全てを注ぎ込んで取り組んでいます。宮崎県の観光に係わってから大分経ち、宮崎県の概況や県民気質も大部解るようになり、「観光からのまちづくり」も綾町と南郷村を手掛け、それらの経験の中で集大成を図るべく、「西米良村でも適用できること」「西米良村では気をつけること」をよく考え、慎重かつ大胆に後押ししています。

西米良村の「観光からのまちづくり」を進める中で、留意したのは、以下のような点です。今のところ西米良村の「観光からのまちづくり」がうまくいっているとしたら、こうした留意点(あくまでも私案です)を地元に伝えることが出来たのかな(?)と考えています。

ア. 温故知新で、西米良村ならではの特徴(魅力)を見出し、それを活かすこと

まず『西米良村史』から調べ始めました。当然の如く西米良村ならではのいろいろな特徴等がありますが、特筆すべきは明治の版籍奉還の時に、領主だった菊池則忠公は自分の領地、つまり村の全ての土地を各家庭に価値均等で分け与えていることです。凄い英断です。ですから西米良村の住民は、明治維新の時から「全て土地持ち」です。そして戴いた「自分の土で生き抜いてきたこと」、これが西米良人の礎だと思います。土地が持てたとはいえ、96%が山林ですから、平坦地はごくわずかしきありません。役場所在地の村所地区で言えば、まず集落を形成するために、多くの世帯は額を寄せ合うように集まって川縁に住んでいます。でも川縁の平坦地は各自の住宅や役場、学校などの公共施設を造ればほぼ埋まってしまいますから、菊池公からいただいた土地の中で、傾斜がゆるい場所を探してそこに田畑を作るわけです。人によっては、造成した田畑が川縁の家から遠い人もおり、農繁期に毎日集落から田畑に通うのは大変ですから、田畑のそばに作業小屋を作るわけで

す。それが作小屋です。

西米良村のまちづくりの一番大事なときに担当された総務企画課長の黒木敬介さん(右の写真左)は、作業小屋と自宅近くの学校まで7キロくらい離れていたそうですから、6歳のときから中学校まで、農繁期はその道のりを学校のある時は毎日往復したそうです。なんとも大変



です。しかし、敬介さんは、「行かなければ学校がないわけだし、帰らないと飯が食えないわけだから、なんにも苦にならなかった」と笑います。そして言います。「お袋が寝たのを見たことがない」。お母さんの一江さん(右上の写真右)は、朝は早くに起きて朝食をつくり、親父さんにお弁当を持たせて送り出し、昼は農作業、夜は夕食づくりです。山仕事をして帰ってきた親父さんは、焼酎を飲んで寝てしまいますが、一江さんはその後片付けや夜なべ仕事ですから、小さかった敬介さんがお母さんの寝るところを見ることがなかったのも無理はありません。

家族みんなで力を合わせ、一生懸命生き抜いてきたわけです。そして一江さんは「塩以外は、なんでも自分達で造ってきた。今でも全部覚えています」と微笑みます。当然、醤油と味噌も作っていて、醤油を作る中間過程でとれる「しよいのみ(醤油の実)」が私は非常に好きで、今も分けていただいています。この文化が、作小屋村の「小川四季御膳」に繋がっていくわけです。

こうした厳しい環境が家庭内と集落の協働を促し、それによって絆を強め、皆凜としています。しかし、皆人がよく、男女共飲み方を実によくしますが、宴席からは笑い声が絶えず、喧嘩したり、説教するような飲み方は見たことがありません。そして子供達も実に素直で、西米良中学校に登下校する生徒は、車が通るときは車のほうに向いて挨拶をします。これには吃驚します。こうした村民性が、「村全体を休暇村にし、村民全体でおもてなしをする」という基本理念に繋がっており、訪れた方が感激するぐらい笑顔の暖かいおもてなしになっているわけです。

ともあれ、地元の資源(魅力)を発見するコツは「温故知新」にあり、『市町村史』はその宝庫の一つだと思います。

イ. 計画の実現に時間を掛けること

西米良村の前にお手伝いした綾町の場合は、主たる資源は照葉樹林でした。つまり、自然です。旧南郷村の場合は、百済王族が逃れてきたという伝説でした。つまり、歴史です。そして西米良村では、作小屋という生活の仕組みや凜としつつ暖かい人の良さです。つまり、究極の“資源(なにか抵抗感がありますが)”である人を主役にした「観光からのまちづくり」ですから、住民が納得してから動き出すことが不可欠です。例えば、小川地区では集落の仕事場になるような茅葺き屋根のおがわ作小屋村を整備し、地元の食材で創った「小川四季御膳」で賑わっていますが、この作小屋は当初描いたパース通

りにほぼ出来上がったものの、パースを描いた2003年には地元住民は動きませんでした。住民にとっては、作小屋村がどういうものかよくわからないし、果たして運営していけるかもよく解りませんでしたから、会議を重ね、そうしている間によく各自の頭の中に具体的なイメージができてくるのでしょう。そういう積み重ねが大事だと思います。パースを示してから完成まで7年ぐらいかかりましたが、黒木村長さんは焦りませんでした。「自立自走」でまちづくりを進めるには、地域住民が主体的に動かれることが不可欠ですから、機が熟すまでじっと待っていました。

つまり、「観光からのまちづくり」においては、「思いついてもすぐやらない」ことが肝要ではないかと思います。いわんや他地域の施設やイベントをパクって直ぐ始めても、根っこがありませんから、ブームが過ぎれば直ぐ枯れてしまい、残るのは借金や次の行動を阻害する失敗体験だけです。

ウ. 動き出した事業に対して魅力を追加していくこと

まともな計画ならば、完成し、開業した時には物見高い“ご祝儀客”が必ずいますから、それなりにお客さんが来るものですが、リピーターを惹き付け、評価を上げていくには新しい魅力を追加していくことが不可欠です。また、熟慮して結果動き出した事業ならば、その“成功体験”がありますからいろいろアイデアが生まれ、それを着実に実行していくようになります。その小川作小屋で、中秋の満月のときに集落の電気を消し、月の明りとかがり火と竹に点したろうそくで神楽の舞が楽しめる「月の神楽」というイベントが始まりました(右参照)。集落の人口が少ないですから、都市では出来ないライトダウン下で、満月に照らされて舞われる伝統的な神楽を楽しめるのは、西米良村ぐらいしかできないのではないのでしょうか。これも西米良村の「不易」の一つと言える、月夜の美しさを活用したものです。早4回を数えています、変に小細工しなければ、世界的なイベントになることも充分期待できると考えています。



魅力の追加が施設を持続させるコツであることは、一人勝ちしている東京ディズニーランド(TDL)をみても納得できると思いますが、TDL程のお金が無いところが殆どでしょうから、如何に知恵を絞るかがです。その鍵は、当該地域だけの温故知新だけでなく、海外事例も含めて「地球規模の温故知新」だと思います。如何に多くの事例を詳しく知り、これを熟慮して練り込むこと(創り出すこと)ではないかと考えています。観光は優れて文化であり、文化(Culture)の源は、Cultivate(練り込むこと)なのです。

エ. 他産業との共存共栄を図ること

西米良温泉ゆた〜とでも、開業した翌年、ほおずきに豆電球を入れた小灯しを村民の数だけ点灯させたクリスマスツリー(右参照)を



飾るようにして、新しい魅力を追加しています。西米良村の特産品であるほおずきは、茎に交互にきちんと実がついているものしか高値で売れず、ぽつんと離れているのは売れません。その売れないほおずきに目を付け、それを村で買い上げて小灯しにしたわけです。ほおずきの宣伝にもなりますし、それまで捨てていたものが少額とはいえ収入の足しになったわけですから、ほおずき生産農家も喜び、村おこしにも積極的に協力するようになるわけです。

魅力的な観光地域づくりは、地域の総合力を高めることでもありますから、いろいろな分野の、いろいろな方策を関連させてそれぞれの解決を図り、逆に一つの方策を計画する際には直接的な目的だけでなく、他の分野のいろいろな課題解決に気を配り、その有機的・効率的な解決を狙うことが求められるようになってきています。二人三脚・三人四脚の時代です。それが虻蜂取らずに終わらないようにするには、深い洞察力と優れた感性が必要で、これを磨き続けていくことが観光プランナーの鍛錬だと考えています。

オ. 名リーダーの戦略とそれを実践するスタッフを支援する「応援歌」を適宜送信し続けること

西米良村の場合、最初の濱砂五朗村長さんに信任いただき、かつその数年後に助役になり、五朗村長さんが亡くなった後を引き継いだ黒木定蔵村長さんからも同様な信任をいただき、「観光からのまちづくり」を長きにわたって携わらせていただいたことは、すごく幸せなことであり、心より感謝する次第です。特に黒木村長さんとは助役時代を含めて18年に及ぶお付き合いになり、名実共に名リーダーになられたと感服します。

計画づくりにあつては、『村史』等を調べると共に出来るだけ現地に足を運び、西米良らしい計画づくりにこだわりました。それと共に最初の計画においては、基本理念と基本方針の設定、それに基づく主要事業をかなり絞り込み、その実現に努めました。このスタンスは早川町や綾町、旧南郷村等の経験で身に付けました。旧南郷村の場合は8年ぐらい関わりましたが、最初の5年ぐらいは当初の計画だけで充分間に合います。また、小さな村ですからあれこれやるだけの財源がありませんでしたから、南郷村にある4つの集落の内、百済伝説のある神門地区だけに事業を絞り、恋人の丘、百済の館、南郷茶屋、百済小路、西の正倉院という5つの事業を完成させ、「村おこし」の軌道に乗せることが出来たわけです。ここまでは田原村長さんの的確なリーダーシップがあったことも見逃せません。そこから先は、次なる整備地区に入り、そこでの計画を考え、その結果「こういうものが必要ではないでしょうか」ということで、追加案件を提案していくわけです。それは後から出てくるもので、最初の当初計画でそこまで見通すことは出来ません。ですから、「観光からのまちづくり」においては計画の見直しではなく、追加をしていくことが肝要だと考えています。ただし、計画の基本コンセプトや、他の地域から学んでも真似しないとか、小さな本物づくりとか、そういう基本方針も堅持しなければ、元の本阿弥になってしまいます。この点も強力なリーダーシップが欠かせま

せん。とにかく最初に作ったプランは、言ってみれば“1段目のロケット”ですから、引き続き“2段目のロケット”を追加していく必要があります。

前述した小川地区の「作小屋村」も、当初の計画にはなかったものです。小川地区で当初のプランで考えたのは、「民話の庄」づくりで、既存の施設を民話の館や民話の宿に衣替えし、民話の語り部を養成し、民話語りを始めることでした。それをスタートさせ、今度は観光客の集客イベントとして山菜祭りを始め、そこに民話語りを組み入れていくわけです。そして常時人が呼べる装置として、西米良の歴史に基づいて「作小屋村」を整備したわけです。そして更なる魅力の追加として始めたのが、「小川花見山」づくりです。

小川地区でもレンギョウとかアジサイなどの花木を生産していましたから、それを元にした魅力づくりの参考事例として、福島の花見山の写真をお見せしたわけです。しかし、ここでも小川の人たちはすぐには飛びつきません。でもそうやって事例を折にふれて見せていると、そのうち“発酵”し、現地に視察に行ってみますと気持ちが変わって、「早くうちでもああいうのをやりたい」となります。そこで、今度はちょっとブレーキをかけるわけです。物まねではなく、独自性がないといけませんから、「植える花木は、西米良村の自生のものに限ることが大事」と話すわけです。あんまりブレーキをかけ過ぎるとやる気をなくしてしまいますが…。毎年3月に植樹祭をやっていて、2014年で5回目を迎えました。鍵は、どれだけ地のものを植えるかです。地のものだけでは確かに地味ですが、長い目で見たらそちらのほうが必ず人が来ると考えています。なにしろ50年近く観光を手掛け、いろいろ盛衰を知っていますから。例えば、宮崎県でもアジサイ(西洋アジサイ)を植えることがブームになり、沿道に相当長く植えているところや西米良村でも沢山植えているところがありますが、観光客はまったく見かけません。ガクアジサイやヤマアジサイだったら、街場では見られませんかから見に来る人がいると思います。こうした失敗事例を沢山知っているのは強いですよ。「こうすれば失敗します」と言われてやる人はいませんから。

でも住民が自分達の好きな花を植えたいという気持ちも解りますから、最初から「これじゃなきゃ絶対だめ」とは言いません。若い頃には事例をいろいろ示して「これはダメ」とか、「これをやるべし」といった決めつけるような言い方をしてきたように記憶しています。でも、西米良村では「最終的判断は地域に任せることも必要な」と思うようになりました。「観光からまちづくり」のプランナーとしては、あくまでもこういう計画・アイデアはどうでしょうかと提示することであって、それを採用するのは西米良村の判断ですから。そしてそれが実現しても、「自分がやった」と言える立場ではなく、あくまでも実行されたのは西米良村であり、地区の住民です。黒木村長さんも時折、「前田さんから知恵をもらって悪いけど、一応私どもが考えてやったと言っています」と言われますが、小生としては「どうぞ、どうぞ」という気持ちで、実現すれば自分の

ことのように嬉しくなります。そもそも長く係われるのもリーダーの理解があつての話ですから。

小生が提示しているのは、当初計画や事業毎の計画や基本設計の他、その実現のための留意点や実現した後の運営等に関する情報の提供です。それを「助言業務」という形で、1996(平成8)年度から適宜送信しています。

最近「目指せ“平成の桃源郷”西米良村応援歌」というタイトルで送信すると共に、年度末にその一年間に送った助言をまとめ、改めて村に送っています(右は最新の4年間の表紙)。



黒木村長さんもしっかり目を通していただいているようで、先述したほおずきを使った小灯しは、たまたま自宅近くの渋谷の街を散歩しているとき、ほおずきで照明をやっている展覧会を見つけ、その場に居合わせたデザイナーに西米良村での応用アイデアを話したところ、「それは面白い」と言ってくれましたので、そのやりとりを応援歌で送ったところ、早速予算をつけてもらい、講習会を実施し、実現に結びついていきました。

これが小生の計画案を意図通り実現させたり、その後の運営に関しても支援・助言する「計画管理」です。小生的には確立していますが、観光業界では確立どころか概念もほとんど知られていないと思います。観光プランナーは、“観光主治医”といった役割をもっと果たすべきだと考えています。

3. 「観光」に対する失敗と反省

(1) 我が国の観光の何が問題か

いろいろ問題はあるでしょうが、前出してきたように観光プランナーという立場で、具体的にやってきた経験に基づいて挙げるとすれば、以下の4点です。

①「観光」に対する捉え方が明確に共有されていないこと

昔ほどではないにしろ、観光に対するアレルギーや観光業が下半身を含めた少々いかげん産業という捉え方も無くはなく、観光が的確に理解されていないことが最大の問題ではないかと考えています。それゆえ、まず「観光の意味と意義」を観光関係者はもとより国民が正確に、しっかり理解・意識することが肝要なのではないかと思います。つまり、原点をしっかりさせることが大事であり、不可欠であると考えています。小生が観光を学び始めた1965(昭和40)年の頃は、観光は「神社仏閣や名所旧跡、各種文化財、行祭事などの観光対象を見ること」と教わりましたが、今はそうした観光対象に加え、その地域の生活ぶりや佇まいなど全てを含めて「光」とし、それを五感で感じることを考えており、それなくして美しい町・国土は出来ず、観光先進国並の観光立国はなし得ないと考えています。

そもそも今使われている観光という言葉の語源は、中国の五経の一つである「易経(周の時代にまとめられた[周易])」の観の卦にある、「観国之光、利用賓于王」(国の光を観るは、もって王に賓たるよろし)に由来し、日本人が創った(と言うか、拾い出した)言葉です。その意味は、「他国の光を参考に観に行く時は、その国の賓客として扱われる」。つまり、周の時代(紀元前1100年頃～前581年)は、前半が西周、都を成周(今の洛陽付近)に移した後半を東周といい、東周の前半は春秋、後半は戦国ともいわれています。この時代、まだ中国に仏教が伝わっておらず、今でいう仏教寺院等はなく、大衆に開放された庭園等も無く、群雄割拠の時代で戦争が絶えず、お互いに敵情視察を重要視していました。そうした視察を受け入れる側にあつては、自国の治世状況の良さを見せつけ、侵略を阻止しようとしたわけでしょう、国賓待遇でもてなしたようです。つまり、ここでいう「光」は、その国の生活ぶり、たたずまい(その背景にある王様の治世ぶり)を意味しており、小生は近隣国となにかと揉めている今こそこの原点に戻り、観光を捉えるべきだと考えています。

我が国において観光という言葉を広く大衆が認知したのは、オランダ国王から徳川幕府に贈られた木造蒸気船に付けた「観光丸」という名前からではないでしょうか。察するに、観光丸と命名した意図は、進んでいる海外の実情を観るという意味が主であることは、まず間違いのないところでしょう。諸説があるようですが、観光の観という字は、「みる」と共に「しめす」という意味があり、観光丸という名称と共に、1875(明治8)年に岩倉具視

が出した報告書『米欧回覧実記』の表紙に観光とあることから窺えるように思います(右参照)。つまり、単に先進国を観るだけでなく、わが国の意気をしめす(誇示する)という意味も併せ持っていたように思うわけです。因みに正式に購入した船には「咸臨丸」という名前を付けていますが、これは「力を合わせて事に望む」ことを意味しており、これら2つの船名に、明治開国時の高らかな心意気を感じられます(詳しくは『観光実務ハンドブック』(社)日本観光協会編、丸善の第1章観光概論、序論 1.1 観光理念(235 頁～245 頁)をご覧ください)。

こうした素晴らしい意味が「物見遊山」に矮小化された(?)のは、昭和初期と戦後の観光ブームではなかったかと思っています。小生が卒業論文を書いた時、担当の教授(この人の専門は観光ではなく、造林学)から、「前田君のやっている観光と、『観光新聞』の観光とどう違うのかね?」と質問され、困ったことがあります。当時、その『観光新聞』は、もっぱら下ネタを扱う新聞だったのです。

②「観光資源」の内容も変わってきたことに対応し切れていないこと

それと共に「観光資源」の意味も、正確に理解することが必要ではないかと思います。前述した(財)日本交通公社が1971(昭和46)年に全国の観光資源調査を行った時は、その対象は神社仏閣や名所・旧跡、行祭事、各種文化財などで、今でもそう考える人が少なくありません。ここに我が国の観光地が、低迷している最大の原因があると考えています。つまり、既存観光地に「いわゆる観光対象」はあるものの、そこに生活感が乏しく、ヨーロッパの先進観光地に見られるような、街全体の美しさがなく、とても「住んでよし・訪れたくなる街」とは言えないからです。

例えば、右の上段は、(財)日本交通公社が1999(平成11)年に発刊した『美しき日本; いちどは訪れたい日本の観光資源』という本です。昔ながらの観光対象を網羅した、一種の日本全体の観光ガイドです。それに対して下の2段目、3段目は、1988(昭和63)年にニューヨークで出版された『ITALIAN COUNTRY』CATHERINE SABINO 1988 Clarkson N. Potter, Inc. という本の表紙と内容の一部です。内容は四季に分けられ、一季に2箇所のイタリアを代表する観光地域を取り上げ、そこでの生活を



中心にその地域を紹介しており、3段目の写真はトスカナのぶどう園における作業員が新酒を楽しんでいるところです。なんとも楽しそうで、一緒にワインをいただきたくになります。日本のは、まさに典型的な絵葉書を集めたようなガイドブックで、「一度行けば済み」となるのに対し、イタリアのは、「そこに行って、しばらく暮らしたい」と思わせるようなガイドブックです。この此岸の差が、インバウンドが4,636万人のイタリアと837万人(共に2012(平成24)年)の日本の差ではないかと見ています。

そうした意味で、魅力的な国土づくりこそが最大の観光戦略であり、地域住民ひいては国民に「観光からのまちづくり」を理解していただき、その施策の実行に参加・協力をしていただくことが大事なのではないかと考えています。単に旧来型の観光資源、それに立脚した観光地、そこに成立するのが観光業という狭い範囲での捉え方を脱却し、「国土総景」「ふるさと賛歌・お国自慢・生活自慢」として捉えていくことが肝要ではないでしょうか。

観光庁が設立されましたが、主に外客誘致に力が注がれている感が強く、国民に観光の意味・意義等に関する働きかけは皆無のようで、我が国の観光的な魅力アップを図っていないのではないかと(?)と思えてしかたありません。現在は「第4次世界観光革命」が進行中で、アジアの国々の国民が観光旅行を本格的に楽しむようになりつつあり、2013(平成25)年の我が国のインバウンドは、1,000万人の大台を超えました。ASEAN諸国からのお客さんも増えていますが、今来ている観光客は主に上流階層で、彼らは世界規模で観光対象を選択していますから、しっかり国土磨きもしなければ、「卒業」されてしまう怖れも無いとは言えません。今、「お・も・て・な・し」が日本の観光的魅力として自己陶醉している感がありますが、サービスの良さ・料理の美味しさだけでなく、景色もおもてなしの一つですし、何よりも国民の笑顔のサービスに優るものはありません。

その意味で何度も言いますが、国民が「観光の意義・魅力・楽しさ」をしっかり理解すると共に、胸を張って世界からのお客さんをお迎えできる「魅力的なふるさと・国土づくり」に、国民それぞれの形で参加することが肝ではないかと思えます。手塩に掛けたふるさと・国土であれば、胸を張って観すことが出来るのではないかと思えます。

③行政に観光の専門家が極端に少ないこと

その意味で国や地方自治体が観光政策を立案し、それを全分野で総合的に実施していく役割は益々大きくなると思いますが、現時点では観光を専攻した役人が殆どいないこと、それに加えて担当者も2～3年で代わり、継続して政策が実行されないというのも大きな問題点だと思います。

誰でも観光旅行をしたことはありますが、それで魅力的で、長続きする観光施設や観光地域が造れるわけではありません。前述した旧運輸省の観光レクリエーション室の若き室長さんもその一例ですが、運営のソフト設計もないままに、ただお金を掛ければい

いとばかりに、お山の中に離れ形式の宿泊施設を造った首長さんや潮の流れがきつい海岸に、無理々々コンクリートで囲い込み、小さな泳げるビーチやマリナーを造ったものの、県外からの利用は全くないのに、毎年堆積する砂を排除するのに5千万円掛けている県(当時の知事)など、反面教師の事例は枚挙に暇がありません。

バブル期に観光が大きく伸びたときに、その専門家を養成するために、観光関連の学科の増設やそうした学科や講座を持つ大学が数多く新設されました。一時は100を超える程になったものの、バブル経済の崩壊に伴い、大型複合リゾート案件が全て頓挫するだけでなく、既存の観光施設の倒産等が相次いだため観光の職場が急速に縮小し、「大学は出たけれど就職する先が無い」状態になり、観光関係の大学の多くは苦戦し、戦線を縮小していきました。集中講義でお世話になった佐世保にある長崎国際大学は、ハウステンボスが卒業生を全て引き受けることを大前提に生まれた大学でしたが、ハウステンボスが苦境に陥りますと一人も卒業生を引き受けることが出来なくなってしまいました。しかし、大学は薬学部を新設し、大学事業を継続するというしたたかさで、切り抜けようとしている(?)ようです。倒産後HISが経営を引き受けたハウステンボスは、当初の“現代の長崎出島(オランダ村)づくり”といった基本コンセプトをかなぐり捨て、ワンピースなどの思いつく全ての“流行もの”を実施して経営を立て直し、また長崎国際大学の観光学科の卒業生の雇用を再開しているかもしれません。このあたりは、「基本コンセプトの厳守・継続は、観光施設・観光地域づくりの持続の必須条件」と考えている小生には、よく理解できないところです。負け惜しみといわれそうですが、小生の半世紀に近い観光経験だけでなく、この間に知見した他分野等の老舗の、老舗たり得る企業理念のしっかりしていることを勘案しますと、HISのカリスマ社長がピークを過ぎたとき、やはりまた大きな転換に直面するのではないかとみていますが…。

観光施設は、基本的に民間事業者任せにすべきだと思いますが、観光立国を目指す上で国や県、市町村全体の観光戦略は益々必要になると思われますから、それを立案できるとまでは行かないまでも、作成を担当するコンサルタントを的確に監督できる感性と知識を持った専門家を雇用したり、育成することは、きわめて大事なことでと考えています。しかし、それは簡単なことではなく、観光も優れて文化ですから、文化三代といわれるように、観光も成熟するには三代かかると思います。「観光三代」です。戦後で言えば、1945(昭和20)年代から1965(昭和40)年代に親であり、それなりに家族で観光旅行を楽しんだ世代を一代とすれば、その子どもが親になって家族で観光旅行を楽しんだ1975(昭和50)年代から1995年代で2代が経ち、2005年代から3代目に入った勘定ですから、そろそろ「初心忘れることなく」成熟した感性を身に付けたいものです。まだ混在していますが、一部には素晴らしい感性を持った首長さんや職員を見かけるようになってきましたのは救いです。一日も早く、もっと増えて欲しいと願っています。

④学童に対する「観光教育」が不在であること

「観光三代」として年輪を重ねていく上で、学童に対して観光の意味や意義、自分達でも出来ることを教えることは、非常に大切だと思います。これに関しては、カリブの国々が先生が学童に観光の意味や意義、サービスのあり方等を教える際の教本『カリブ観光教本』を見た時、そのレベルの高さに吃驚しました。右はその表紙で、右下が小学校1年生に教える内容です。最初に教える〈基本概念〉も当たり前ようですが、大事なことを簡潔に書いてあります。基本概念の6. 誰でも他の土地へ行けば観光客になる、を西伊豆町の先生が知っていれば、観光客を避けるようなことはなかったと思います。無論、当時伊豆の観光開発の仕方や、一部観光客のマナーが悪かったのは事実で、その点を問題にしたのでしょうが…。



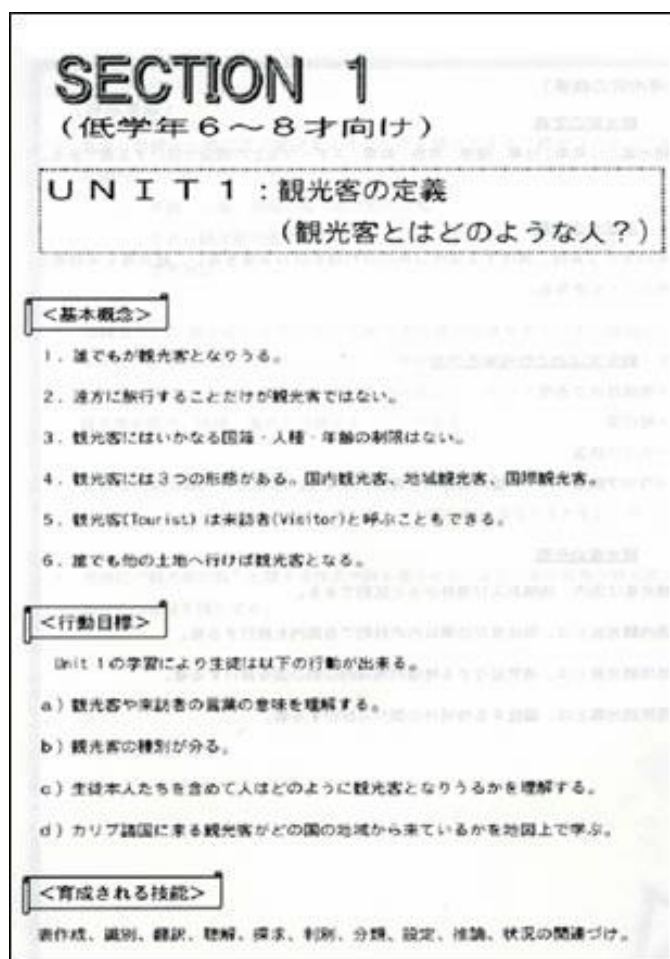
小生はこの本にいたく刺激され、前述したように宮崎県でおそらく日本初となる『観光副読本わたしたちにできることってなあに?』の制作をお手伝いし、それが一つの契機となっていくつかの素晴らしい「観光教育」が始まったのは、なんとも嬉しいことでした。また、こうした宮崎県の動きに刺激され、由布院等でも似たような動きが始まりましたが、残念ながら全国的には反応はあまりなかったように思います。とりわけ国がそれによって影響を受けたような動きが全くなかったのは、きわめて残念に思っており、旧(社)日本観光協会の総会で知り合った元観光庁長官の溝畑さんに関連資料を郵送したのですが、なしのつぶてでした。残念!!。

(2) 我が国の観光政策は有効に機能してきたか

我が国の観光政策は、基本的に国や地方自治体が策定し、実施してきたようですが、これに関しては基本的にあまり詳しくなく、自分が係わったところでコメントすることにします。

●旧運輸省の「家族旅行村」の原案作成から実際の計画・設計までに携わって

国の観光政策としては、旧運輸省の「中規模観光レクリエーション地区(通称家族旅行村)整備計画」というのがあ



りました。旧運輸省としては、所管のユースホステルが小規模、大規模観光レクリエーション基地の中間に位置する施設として、大阪の万国博を契機に急速に増加してきた家族旅行をターゲットにして、フランスの家族旅行村をモデルに日本版家族旅行村を整備しようという政策でした。前述したように、その調査をラックが受託し、小生が担当してその原型を創るとともに、実質的には第1号として当時運輸省の外郭団体であった観光開発財団を通して、宮崎県の「須美江家族旅行村」の計画づくりから主要施設の基本設計までお手伝いしたわけです。

運輸省の担当者の方も若い方で、原案づくりは基本的に小生に全て任せていただきました。ただ、発注担当の観光レクリエーション室(?)の室長さんは、たった1年の調査期間内に2度ほど替わりました。観光レクリエーション室が運輸省の出世ポストどころか、傍系もいいところで、キャリア官僚にとっては一瞬の腰掛けだった(?)のではないのでしょうか。前述の通り、ある室長さんは、海外での個人的な旅行体験を得々述べるだけで、辟易したことがありました。つまり、観光計画的には全くの素人でした。観光開発財団の担当者も同様でしたから、こちらは観光計画の“専門家”ということで、ブイブイやって思い通りの計画を作成しました。

迎え撃つ(?)宮崎県の、その当時の知事は黒木博氏で、岩切章太郎氏と“車の両輪”となって、宮崎県の観光振興を熱心に進め、それにより宮崎県の「沿道修景」は哲学、修景の美しさ、修景された沿道の長さなど、全ての面で我が国の最先端を行くもので、宮崎県をして“新婚旅行のメッカ”に押し上げる原動力になった方です。黒木知事さんが実行されたのは、なんとも素晴らしい観光政策でした。ですから家族旅行村の計画に対しても凄く熱心で、計画案の説明はすべからく知事室で担当の部長、課長が同席されて行われましたから、出来上がった計画は全ての確に実行されました。

ただ、その後他の地域で家族旅行村が誕生したという話は、寡聞にして聞いていません。宮崎県の家族旅行村が実現したのは、一重に宮崎県の元知事黒木博氏の観光に対する感性・積極的な取り組みがあったことが最大の要因だったと思います。国策で国営公園等を自ら整備し、外郭団体に運営する例はありますが、国策の観光関連施策でも「実施するのは地方自治体」が殆どですから、国以上に地方自治体における観光の専門家の育成を図ることが大事ではないかと思います。

ただ、首長さんに対する「観光教育」は、はなはだ難しく、いわんやこれから生まれるであろう首長さんに対する「観光教育」は、まったく不可能です。とすれば、前述したように、国民に対する観光の意味・意義の啓蒙同様、その本質を理解され、かつ観光客としてではなく、具体的に「観光からのまちづくり」を進める上で要点を学んだり、感性を磨くべく様々な観光地を一つでも数多く見られることを祈るばかりです。

●旧厚生省の「大規模年金保養基地」は大失敗だった

旧厚生省の「大規模年金保養基地」、いわゆるグリーン・ピア計画においては、1974(昭

和 49)年に全体構想を担当しましたが、高齢社会に対する認識がまったく不十分で、机上の空論だったと反省しています。整備候補地の選定はあまりに政治的で、辺鄙なところに分不相応な大規模施設を造ったり、運営も外郭団体が行うなど当初から問題含みで、かなり早い時期に破綻が露呈し、結果的には大失敗だったと思っています。1972(昭和47)年にはじまって、2005(平成17)年3月に清算されたグリーン・ピアの総整備費は3,728億円、売り払った時点の合計額は48億円です。つまり、3,680億円、利子等をあわせると約4千億円という国民の大事なお金が消えてしまったわけです。

その全体計画は、年金福祉事業団から年金保養協会に委託され、そこから委託されて小生と同僚の渡辺貴介氏(その後東京工大に移り、教授。2001(平成13)年没)で主に下作業したものです。その当時、アメリカのサン・シティとかの“老人保養施設”が喧伝されていましたが実際に見に行くことはなく(この点が返す返すも痛恨!)、いろいろ机上で勉強しました。結果的に「サン・シティはまったく高齢者だけで、家族の見舞い・訪問も自由に認めないというのはいかがなものか。日本の老人保養施設はもっと大家族主義的な施設がいいのではないか」ということで、利用料金だけは年金受給権者を安くするという以外、結果的に誰でもが利用できる保養施設にしました。整備したところが、利用しやすいところとは言えない不利さにお役所的な運営もあって、思うように人が集まらず、短い命になってしまったわけです。

この大規模年金保養基地は、経済高度成長期においてもはやされた“第三セクターによる大規模プロジェクト”の一つです。モデルはフランスのラングドック・ルシオン地方(マルセイユの西側。東側は19世紀初頭からリゾート開発が進められ、高級リゾート地に成長したコートダジュール)の開発です。このラングドック・ルシオン開発は、急増する大衆リゾート需要に応え、かつ開発が遅れていたラングドック・ルシオン地方の活性化のために進められたものです。その手法として、官(第1セクター)の許認可権と民(第2セクター)の資金力・経営ノウハウを生かすべく、共同で第3セクターを設立して事業を進めたわけです。この開発方式が成功した要因として、第3セクターに土地の先買い権を与えたことと、拠点毎に建築デザインを1人又は1チームに任せて、統一された景観を創り出したことが大きいと見ています。しかし、わが国はそうした“肝”を学ぶことなく“格好”だけを真似、以降雨後の竹の子のように第3セクターが生まれたものの、観光関係の第3セクターの半数以上は赤字です。なにしろ第3セクターより先に偉い人が土地を先にかうことがあるくらいですから、うまくいかないのも無理はありません。嗚呼。

●大規模保養基地整備法を通称リゾート法と呼ばれたことが間違いだった

大規模保養基地整備法(1987施行)も前述したように、計画をする人間をはじめとして観光関係者の未熟さ、にもかかわらずそうは思っていなかった「夜郎自大」さ故に、大やけどをしました。この法案の元は、前述したラングドック・ルシオン開発等を見た議員さんの発案で始まった格好ですが、フランスは労働時間の短縮(休日の増加)等に係わ

る法案を後々リゾート法と呼ばれるようになったのに対して、我が国は旅行の発生に係わる労働時間の短縮や有給休暇の消化には手をつけずに、リゾート先の受け皿の整備を先行してしまいました。フランスと後先が逆でした。

リゾートブームが起きたのは、3つの要因がありました。一つは、バブル景気による金余りと国民の欧米なみのリゾートに対する期待です。特に株は鰻登りで上がり続けており、週刊誌も「毎週が給料日」と株の指南コーナーを設けて煽っていたくらいです。もう一点はバブル経済の熱気が届かず、相変わらず過疎等で寂れる一方の地方が、千載一遇のチャンスとして開発の誘致に狂奔したことです。それも規模が大きいほど経済効果が大きいと踏み、土地提供など積極的に協力しました。宮崎県も一つ葉海岸を整備候補地に挙げ、地域一帯に保安林の網がかかったところでしたが、当時の松形知事は元林野庁長官という経歴を生かし、福島県と三重県に並び第1号で認定され、整備に漕ぎ着けています。

3つ目は、事業の拡大を考えていた、これまでリゾートに係わってこなかった既存の企業群の参入です。地上げ屋さん、鉄鋼屋さん、焼き肉屋さん等も参戦してきたように見聞しています。それには政治家の陰もあったようです。共通しているのは、理念や理想よりも目先の開発利益の追求です。なにしろ整備が100億円単位で、1,000億円もあろうかというレベルでしたから、まさに狂奔したわけです。

しかし、バブル経済の崩壊によって直ぐさま旅行需要が萎縮し、受け皿は一気に倒産してしまい、しばらくは「リゾート」という言葉は禁句になったほどですし、リゾートのイメージは最悪になりました。その意味で大規模保養基地整備法をリゾート法と呼ぶのは間違いだと思いますが、いまだに使われていることがあり、「大規模保養基地整備法憎ければリゾートも憎い」となり、リゾートのイメージは立ち直れないほど傷付けられ、身の丈にあった日本らしいリゾート・ライフが定着しないのは、なんとも残念な話です。

（3）私は観光分野で何を失敗し、反省しているか

半世紀近く観光に係わり、複数年に係わるものも含めると約400件に及ぶ調査や計画に携わってきましたから、前述した「大規模年金保養基地」や大規模複合リゾート計画等も含め、いくつもの失敗や未熟故の後悔を重ねてきました。計画での失敗は、仕事を依頼していただいた方には、大変申し訳ない話ですが、あえて3つの例をお話することになります。

●計画対象地の歴史・風土の理解が不十分だった山形のワインレッド・クアパーク

山形県南陽市の温浴施設「南陽ワインレッド・クアパーク」の計画を手掛けたことがあります。1989(平成元)年でした。それに先立ち1987(昭和62)年に、明治時代にイザベラ・バードがこの置賜盆地を訪れ、彼女がこの地域を「東洋のアルカディアだ」と言っ

た言葉を“金科玉条”として、山形県が温泉地の数(83箇所)、温泉保有市町村率(84.1%)など全ての面でバランスのとれた日本有数の温泉県であることを示し、それに基づいて山形県温泉地振興計画『山形県クア・アルカディア開発基本指針』の策定をお手伝いしています。その計画は、核となる温泉地を「クアポリス」とし、核となる拠点を「クアパーク」、そこにドイツのクア施設のような「クアハウス」を全県的に整備していこうというものです。

その第1号として、南陽市で計画したのが「南陽ワインレッド・クアパーク」というわけです。南陽市はブドウの産地でもあり、ブドウ畑に囲まれ、見晴らしも良く、日当たりも良い、小高い場所を整備適地として選びました。そしてイザベラ・バードに因んで、ワインカラーの洋風の建物にしたわけです。ところがその場所が、実は江戸時代に制定された赤湯八景の一つで、小高いところに臨雲亭という建物もあったそうだったのです。恥ずかしいことに赤湯の歴史を十分に調べず、イザベラ・バードの足跡に目を奪われ過ぎていて、赤湯八景のことまで全く思いが及びませんでした。

また、ぶどう畑を取り込んだものを計画していたのですが、当時の農地法では農地を農業用以外に利用する場合、ブドウの木を伐って農地でないようにする必要があった(?)そう、で、“ブドウ畑に囲まれたワインレッド・クアパーク”にはなりません。また、当初からソフトの設計も行う予定でしたが、実施設計からはまったく係わりがなくなっていました。理由は解りませんが、施設の名前もよく解らないハイジア・パークという名称になり、驚きました。経営的にはなかなか苦労されているみたいで、トータルに関われなかったという不満さ以上に、計画の未熟さを申し訳なく思っています。

ではどうすればよかったのか。「れば・たら」の話になりますが、赤湯八景の伝統を活かし、地元の材をふんだんに使い、道後温泉のような和風の施設を造れば良かったかなと思います。とは言え、当時は和風なものを提案しても通る時代ではなかったのも事実です。事実、山形県の別な町でプール付きの温浴施設の話があった時、「是非、和風の施設を」と話したら、小生に任されることはありませんでした。当時地方の方は、より強い都市志向(西洋文明志向)を持っていたように思います。その頃、富山県で健康関連施設として和風の施設を提案したときは、「富山じゃ受けません。若い人が古い自宅を壊して洋風にする時代です」と一蹴されたことがありました。同じような言葉は、京都の茅葺き集落の京都の美山や五箇山でも見聞きました。「古い建物を残しておくのは恥ずかしい」と、お金を持っている人ほど早めに、茅葺き屋根の家を現代風の家建て替えていました。地方で当時、「和風というのは昔風で、現代風ではない」という風潮が強かったですが、今思えば、もう一歩先に踏み込んで地元の歴史を学び、頑張ればよかったかなあという反省はあります。しかし、それだけの歴史観や理念・哲学が無く、未熟さを羞じる以外ありません。

●本格的なリゾート・ライフの経験も無いままに、「想い」だけが先行した鳥羽浜離宮

私が「日本型リゾート」という言葉を使い始めたのは、前述した山形の仕事の後くらいからだったと思います。前にも述べましたが、大規模複合リゾート計画がブームになった時、アメリカのボカウエストやハワイのハイアットリージェンシー・ワイコロナ、ニースやコートダジュール、ラングドック地域、イタリア・サルディニアのコスタ・スメラルダなど海外のリゾートをいろいろ見ました。その中で印象的に残っているのは、ラングドック地域のグランド・モットとポート・グリモーの違いです。

前者は、海に張り出す形でマリナを整備し、海岸沿いにビル風が生じないように三角形のマンションを林立させた、ポンピドーセンターを設計したジャン・バラディールが手掛けた極めてモダンなリゾートで、最初に見た時(1972)は、さすが“20世紀のピラミット”と吃驚しました。しかし、2度目に見た時(1986)は、斬新なデザインのマンションを、フランスの大衆が買えるような安い価格で販売できるような“安普請”にしたため(?)、マンションの壁にクラックが入っていたりして、全体に色褪せて見えました。しかし、その時見たポート・グリモーは、グランド・モットとはまったく逆でした。マリナは内陸側に掘り込み、それに沿って三層のシックなマンションの出来ており、全て縦割りになって屋根の高さや壁の色も変え、「個」が主張されたリゾート・マンションで、家の前からヨットやボートに乗れるようになっています。これを設計されたフランソワ・スポーリーさんの設計事務所もこの中にあり、たまたまおられた氏とお会いし、お話を伺うことが出来ました。曰く、「全体のコンセプトはジュネーブの博物館で見た、海上に建てられた高床式の家がヒントになった」と聞き、博物館の意味も含めていろいろな意味で“目からウロコ”でした。ここは、時間が経てば経つほど味が出て、価値も高くなるリゾートだと思いました。

大規模複合リゾート計画のブームは、前出したように1987(昭和62)年に施行された総合保養地域整備法がきっかけでした。三重県をして第一号承認の一因になった、鳥羽市の大規模複合リゾート計画のプランづくりの話が来たのが、法律施行の1987(昭和62)年でした。そうそうたる一流企業からなる委員会が設置され、その一員である知り合いの清水建設の人が「小生に頼みたい」ということで、元IBMの副社長さんをされていた濱口光彦鳥羽市長を紹介され、お会いすることになりました。その席上欧米のリゾートに対する小生の印象等やそろそろ日本も日本らしいリゾートを造るべきだと話し、“口頭試験”に合格した格好で小生が担当することになりました。市長さんは「どうせ造るなら鳥羽市らしいもの、できれば和風のリゾートを造りたい」ということで、潮の干満を利用して海水を循環させている東京の浜離宮をモデルにした「鳥羽浜離宮」を提案し、賛同をいただきました。以降は一切お任せで、事業性を考えてかなり大規模なものになる予定でした。

しかし、バブル経済が破綻したとたん、リゾートブームはピタッと終わりました。なんとか規模を縮小したりして実現を図ろうとしたみたいですが、徒労に終わり、実現し

ませんでした。その後、各地の大規模リゾートの破綻の厳しさを知るにつけ、実現しなくて良かったと胸を撫で下ろしています。つらつら考えてみるに、国内外のいろいろなリゾート地を見に行きましたけど、せいぜい1泊2日で、ゆっくり滞在してリゾート・ライフをエンジョイしてみる経験はまったくありません。つまり、「滞在する」という概念というか、中身が解っていませんでした。

大規模リゾート計画の参考にすべく、イタリア・サルディニア島の「コスタ・スメラルダ」を見に行き、現地で聞いた話です(今となってはうろ覚えですが)。「コスタ・スメラルダ」をプロデュースしたアガ・カーンIV世は、世界で有数の競走馬の所有者で、世界期に浮き名を流した父アガ・カーンIII世に連れられ、小さい頃から世界のいろいろな一流リゾートを見て育ったのでしょう。アメリカに留学していた時、サルディニア出身の同級生から「サルディニアはもともと流刑地で、開発が遅れているので、なんとかリゾート開発をして欲しい」と頼まれたそうです。我が国の総合保養地域整備法施行の時と同じです。IV世は、最初は出来ないと断っていたそうですが、口説いた同級生も必死だったのでしょう。ある天気の良い日に、船で海に連れて行き「ほら、陸から見るとゴツゴツなのに、海から見るとこんなにきれいだろう」と。その景色と熱意にほだされて、リゾート開発をすることになったそうです。

しかし、IV世がとった行動は、実に堅実かつ大胆でした。まず、最初にローマとミラノからの空路を拓きます。そして地元にも、開発資材にも使うべく、地元の土を使って出来る煉瓦工場を建てています。それと共に、乱開発を防ぎ、地域全体の景観の調和を図るべく地域全体の景観計画も策定しています。そうした地ならしをした上で、ホテル整備に取り掛かります。小生が行った時は、ホテルは4軒しかありませんでしたが、共通しているのは非常にシンプルな基本コンセプトでした。静かな環境で、人目につかず、静かにリゾート・ライフを楽しめることを基本とし、施設構成はシックなホテルとレストランとプールとビーチだけです。一軒だけテニスクラブとマリーナがありますが、自分の船で来る方も多い、富裕層をターゲットにしたリゾートです。見せてくれませんでした。最高級のビトリッツアというホテルはコテージ・タイプで、屋根は島の石を張って空からも見つけられにくくしており、海岸線にも木を植え、部屋からは海が見えるが、海からは覗かれないようにするなど、徹底してプライバシーが保たれるようにしています。実際に見たロマンチーノというホテルは、その名のようになかなかロマンチックな、おしゃれなつくりで、客室もそんなに大きくなく、割と小さめでしたが、お隣のベランダが見られないようになっていました。恋人とベランダで何をしても見られる怖れはないわけで、つくり方が上手だなと思いました。なんとも「桁違い」の経験の差で、見事なプロデューサーでした。

●「夜郎自大」だった大規模リゾート計画

バブル経済によって派生したリゾートブームや1987(昭和62)年に施行された総合保養地域整備法に後押しされた大規模リゾート開発ブームの際には、前述した「鳥羽浜離宮」を含め、220数件の大規模リゾート計画を手がけました。幸か不幸か一件も実現せず、今となっては胸をなでおろしています。

計画を作成するのにあたって、それなりに世界のリゾートを見ましたが、そこでリゾートをしたことはありませんでした。ポート・グリモーを見てそれなりにツボは掴んだように思いましたが、計画・設計者のフランソワ・スポーリーさんはそこに事務所を構え、365日リゾートを体験しつつ、世界各地のリゾート計画を手掛けているわけですから、経験のレベルが違います。コスタ・スメラルダも、開発者のアガ・カーンIV世の豊かな体験を踏まえ、その上でもっといいリゾートを造るにはどうすればよいのかを考えた結果、セレブ御用達のリゾート;コスタ・スメラルダが出来ているわけです。

自分自身、長期のリゾート滞在を体験したことがないまま、大規模リゾート計画をしたのは、まったくの夜郎自大だったと反省しています。因みに夜郎自大というのは、漢の時代、中国大陸の西にあった夜郎国は、漢がその又西にある越南を牽制するため使者を夜郎国に派遣した時、夜郎国王は尊大にも「我が国の漢とどちらが大きいか?」と聞き、使者を絶句させて、その後夜郎国は漢に滅ぼされてしまいます。つまり、「世間知らずで、自信過剰」なことを言います。なんとも当てはまりすぎる言葉です。嗚呼。

●書き残したい『私製観光黒書』

そういう意味で今、私が一番書きたいのは、失敗事例を集めた『私製観光黒書』です。約半世紀観光に係わってきて体験したり、目撃した失敗事例やひどいと思われる、観光関係の“悪い事例集”です。それを集め、そうした悪しき“二の舞”を踏むことなく、小生のテーマである「観光からのまちづくり」に邁進すると共に、畏れ多くも世界の誇れる観光立国の一石たらんと考えたわけです。毛沢東の言葉を借りれば、「反面教師例集」を自分なりに整理しようかというわけです。自他共に見られる夜郎自大的な失敗事例集です。本の題名を黒書としたのは、昨今の観光白書が何ら反省すること無く“自画自賛”に終始しにもかかわらず状況が徐々に悪くなってきているのを“おかしい”と考えたことによります。

振り返ってみて思うに、観光に携わる人、とりわけ公務員の方で、大学で観光を学んできた人は極めて少なく、また殆どが2、3年で異動してしまうため、じっくり観光のあり方を考える時間が殆ど無いのが実情でしょう。個人的な旅行体験の多い方もおられますが、サービスする側とされる側では全く違い、むしろ観光地域の計画に個人旅行の体験を振りかざすのは、マイナスな場合も少なくありません。武士の商法と同じです。そうした人への情報提供として考えられたのが、国内外の“成功事例集”です。今でも成功事例集が多く出されていますが、それが「何故生まれ」、「現在どうなっているのか」、「なんら問題はないのか」、「将来大丈夫か」をしっかりと精査しているだろうか、と疑問に思うことも少な

くありません。そうした成功事例集の編著者として記されている、高名ではあっても観光地や施設づくりの専門家ではない委員長や委員の名前を見ますと、全ての現地調査をせず、調査会社のレポートを机上でチェックしているだけのものも少なくないのではないのでしょうか。それゆえそうした事例集は、それを鵜呑みにするのは論外で、せいぜい視察に行く対象を選択する資料の一つぐらいの役割でしかなく、それ以上を期待するのはケガの元だと思います。

諸行無常の世界ですから、何時までも“成功を続ける”こともないわけですからそうした“視察先選定参考事例集”にあまり目くじらを立てるよりも、同じ轍を踏まないためにも“失敗事例集”こそが、学ぶべき点が多いのではないかと思うようになったわけです。しかし、観光のマイナス面の現状を書くのは、成功事例を書く場合の何倍かの検証が必要なため、うまくできるかどうか、少々不安もあります。その点、アレックス・カーの『犬と鬼』を読んだ時(2003(平成15)年)は、本当にびっくりしました。鋭い指摘も去りながら、最初英語で書かれた本の巻末には、400以上の引用・参考文献が名を連ねてあります。ここまで出来る自信はありませんが、恥をさらしつつ、拙い一石を投じようと考え、自らも荷担し、かつ見聞きした悪事例を“黒の10箇条”とした、目次案は以下のとおりです。

前田豪の『観光黒暑』の今のところの目次案

1. 真の目的は別にある? 「建前」で高額公共事業
 - 全便満席でも目標乗客数に達しない「静岡空港」
2. “お偉い”お役所と“未熟な”プランナー・建築家の“共同正犯失敗事業”
 - 志は小さかった大規模年金保養基地「グリーン・ピア」
3. 夜郎自大だったお粗末な事業
 - レジャーはオオニシにマかせて大ゴケしたテーマパーク「レオマ」
4. 羊頭狗肉の欺瞞的事業
 - 環境博とは笑止な「愛知万博」
5. 時代が読めていない音痴な事業
 - 白砂青松の浜に、狭小なコンクリート製海水浴場「宮崎サンビーチ一葉」
6. “都会並み・本土並み”でますます人が離れる地方の公共事業
 - 便利になったが、観光客は減っている「離島振興策」
7. 看板が泣く情けない事業
 - 古都が泣く「金沢の駅前」
8. 世界の産物をお土産として売る“日本を代表”する観光地
 - 生活感がなく、“見せ物化”している「世界遺産・白川郷」
9. ふるさとの景色を壊すふるさと振興事業
 - コンクリートのオブジェか、「豊後高田のふるさと砂防事業」
10. 外国の名所のマネで“観光後進国”のお客さんと呼ぶ事業
 - 日本に2箇所もある「モアイ像」

4. 「観光」の計画と実現

(1) 私が関与した「観光計画」は実現したか

●観光施設としては、盛岡手づくり村を除いて反省点も多い

観光施設については、「盛岡手づくり村」「寒河江チェリーランド」「南陽クアパーク」「棚倉スポーツランド」、千葉県大網の「季美の里」、静岡県のリゾートホテル、宮崎県の「ハイビスカス・ゴルフ場」などは実現していますが、「盛岡手づくり村」を除いて反省点も少なくありません。

「南陽クアパーク」については、前出したように多々反省しているところですし、「寒河江チェリーランド」については、我が国のサクランボがアメリカから伝わったものの、そのルーツはトルコのギレスンというところにあり、それがヨーロッパに伝わり、かつアメリカに伝わって日本に伝わってきたという“物語”をコンセプトにして、和風の施設を提案したのですが、計画作成後手を離れ、洋風なテーマパークが出来、なんと観光客が殺到したとのこと。かなり評判になり、その“仕掛け人”という方がマスコミの寵児になり、おやおやと思いました。今はどうしているのでしょうか。「棚倉スポーツランド」は、計画通りにほぼ出来ましたが、途中からまったく係わらなくなったため、その後の様子はよく解りません。東北大震災と原発の事故で苦勞されていると推察されますが、一日も早い再興を祈っています。

千葉県大網の「季美の里」は、民間企業の事業で、その構想計画をお手伝いしました。その計画作成のため、ボカ・ラトンやダラスのフェアウェイ・フロント・ハウス(ゴルフコースに面した住宅)を見に行き、「これはゴルフ好きにはたまらない住宅だな」と思い、我が国もそういう時代が来始めたのか、と感慨深いものがありました。しかし、ゴルフ場とセットになった全体の施設名は和風でしたが、住宅の名称にアメリカの有名な住宅地の名前を付けたのはいささか予定外で、バブル崩壊に伴い、超高額の日本初のフェアウェイ・フロント・ハウスは、千葉の地名に引っかけていろいろ揶揄され、あえなく“新しい時代”の扉は閉まってしまいました。

こうした小生が手掛けた観光関係の施設計画が実現した理由は、殆どのケースがやる気十分で計画づくりに取り掛かったことによります。そのやる気も、時代の風をしっかり受けていましたから、開業まで漕ぎ着けられたわけです。しかし、時代の風はいつも同じように吹いてくれないので、この辺の見通しが難しいところです。

●観光からのまちづくりは、結構実現していますが…

前述しているように、観光からのまちづくりは、結構実現していると思います。例えば、西伊豆町の沿道修景や山梨県早川町の基本コンセプト「自然の恵み・人のふれあい・

南アルプス邑」は今も使われていますし、観光案内所兼物産館「南アルプスプラザ」や「白簾史郎山岳写真館」などは計画案通りに実現しています。

また、福島県広野町の「東北の春を告げる町」も、ミカンの北限を告げる各戸にミカンの木を植える運動など一部実現しており、このコンセプトは東日本大震災まで使われてきました。前述した宮崎県の旧南郷村、綾町、西米良村は、いずれも(社)日本観光協会(当時)の「優秀観光地づくり賞」を受賞しており、一時的に宮崎県で“一番注目されるまち”になりましたが、残念ながらその後旧南郷村のまちづくりは失速してしまいました。

「観光からのまちづくり」が実現した要因は、地方自治体においては首長の意欲とリーダーシップに寄るところがきわめて大です。首長さんのカリスマ性がさほど強くないところにおいては、担当課長さんの手腕が鍵になります。ただ、担当課長さんは数年で替わるため、優秀な課長さんが担当されているときに、一気に進めておくことがポイントかと思います。

(2) (一般的に)観光計画はなぜ実現しないのか

●発注者に「実現させる強い意欲」に欠けること

観光業は、昔から「三気(人気・景気・天気)商売」と言われ、人気に左右されるところが大きな商売です。現在は、これに病気、狂気(テロや戦争)もあり、「五気商売」になり、ますます変動の大きな商売になってきました。ともあれ何処かで人気を博した施設が出来れば、必ずそれを真似た施設が出来てきます。最初に博した人気の度合いが大きければ、真似をするとところが増え、初期段階の模倣施設はさほど手間を掛けずに実現します。この類の施設計画は、大規模リゾート施設で懲りましたが、いわゆる観光施設では、その土地ならではの固有性が問われますから、“産みの苦しみ”を伴います。楽しては出来ません。それゆえ「今、流行だからうちも造りたい」といった“願望的な計画”はともあれ、創造的な観光施設の場合、財源確保、事業性などが曖昧な計画は、ほとんど実現していないようです。つまり、観光施設は、発注者の本気度が実現を左右すると考えています。

「観光からのまちづくり」も同じです。具体的に何がしたいかはっきりしないままで、体裁を整えるような市町村観光計画は、殆ど実現しないと思います。名前は出せませんが、小生的には同じような想いで取り組んだ市町村観光計画の中には、大きな賛同が得られなかったのか、継続的に支援する機会が得られず、その後の整備状況も聞こえてこず、“お蔵入り(?)”になっているケースがあります。

おそらく、何処の市町村観光計画も同様で、首長さんの本気度如何にかかっていると思われます。その意味で、「クライアント・アナリシス(核となる発注者の意向調査)」を

事前にしっかりやることが大事なのではないかと思います。その一方で、発注者にあつては、プランナーをしっかり見極めることが大事なのではないかと思います。

●観光をよく知らない人が計画していること

西米良村における例です。超有名な大学の先生にキャンプ場の再整備計画を依頼したことがあります。小生はその調査を発注した時点でまったく知らず、レポートが出来た時点で村長さんが見てくれないかと送ってきました。一読して絶句しました。コテージの施設配置図の、コテージがまともな図形ではなく、斜めになったりしており、パース(と言える代物ではないのですが)を見ますと、やはりコテージが垂直に建っていないのです。イメージを伝えるための先進事例のカラーージュもあまり知らないのか、音痴なのです。30頁ぐらいのレポートで、お値段は200万円です。村長さんも怒って、「金を払うな!」と言っていました。恐らくその先生を担ぎ出した担当者は、彼の講演か何かを聞き、肩書きと併せて選んだのでしょう。

今、観光関係の大学で、図面を描かせる講義があるところは、殆ど無いのではないのでしょうか。老舗の立教の観光学科にも無い(?)と思います。図面が画けない、もしくは読めませんと建設費の算定が出来ませんから、事業費も算定できません。したがって、収入の予測が出来ても、費用対効果が判定できないことになり、まともに事業決定が出来ないということになります。しかし、言うことは達者ですから、仕事を引き受けるところまで行くものの、流石にそれだけでは実現しませんが、先生方は実現にはさほど固執しないようで、懲りずに受注を繰り返すようです。

まちづくりにおいても、お粗末な例は少なくありません。宮崎県の例です。県内のある大学の先生方が宮崎県の観光に対して提言した本を出され、著者のお一人と知り合いだった関係で贈っていただき、読んでのけぞりました。デザイナーだったかの方が先生に転職され、書いた提案に「宮崎スペイン化計画」というのがありました。季候が似ているからだそうです。そして県都宮崎市に対しては「ワシントン化計画」なる提案をしています。公的施設の構成等が参考になるからだそうです。こういう先生に教えていただいた生徒はどうなるのでしょうか。こうした例をみますと、残念ながら「観光三代」の道は、先行き大分遠い感じがします。

5. これからの「観光」・「観光地づくり」・ 「観光計画」への提言

—これからのわが国の観光、観光地づくりに必要なことは何か

この提言も観光プランナーという立場で、以下の4点を挙げたいと思います。

①観光の意味・意義と共にふるさと磨きの必要性を国民一人一人が自覚すること

今、日本の観光で一番課題だと思うのは、観光の意味を非常に狭い従来型の観光業者、観光地という概念で捉えており、政府が掲げるインバウンド2000万人という目標もひたすら経済効果を訴えているのは、本末転倒だと思います。それよりも大事なことは、まずもって国民も参加して魅力的なふるさとや国土を創った上で、訪れてきた人をおもてなしするという発想です。そして基本となるのは、やはり「住んでよし」だと思います。

「パリがいい」って言う人が多いですが、私が最初にフランスに行った時(1972)、マルセイユに住んでいる人たちが「なんでパリがいいんだ?、俺たちの町が絶対一番いいのに」と言われ、吃驚しました。空威張りじゃなくて、本当に自分たちの町はいいところであり、ナンバーワンだと思っているのが、非常に印象的でした。今の日本の地方都市で、「東京何するものぞ」という考え方を持っているところが、どれほどあるのでしょうか。そういう気概を醸成してこなかったことが無秩序な東京一極集中につながり、間違いだったと思います。ただ、今の若い人の中には、自分のやりたい仕事を求めて積極的に地方に移住する人も出て来ていますので、若干考え方が違ってきているかもしれません。それが希望だと思います。

地方都市の観光的魅力を表現するのに、「小京都」っていう言葉を未だに使っているところを見かけますが、そう呼んでいる限り京都を上回る魅力的な町にはならないと思います。金沢でも使っているのを見ると、情けなくなります。「天下の書府」の基礎を築いた前田利長・利常公も怒っているのではないのでしょうか。その点、千葉県の佐原が「江戸勝り」というコンセプトでまちづくりをしており、その考え方はいいと思います。例えば、「ここにしばらく住んで、レストラン廻りなんかやったら面白いんだろうな」とか、「この町いいね、住みたいね」という魅力を感じるようなまちづくり、国づくりをしていかないと、この国は立ちゆかなくなるのではないかと危惧しています。

情報発信もそうです。前述したように『ITALIAN COUNTRY』という観光プロモーションの本は、中流家庭の居間や台所を写真に写し、その中に地元のワインが置いてあったりして、ごく普通の生活文化を見せています。それがイタリアの魅力であり、それをおしゃれな形で発信しており、それが目の肥えた観光客の誘致につながっています。情報発信にも一種の独断と偏見というか、いいと思ったことに絞って掘り下げた情報を発信していかないと、目の肥えたお客さんは惹き付けられないと思います。

町の景観についても住民一人一人が関心を持ち、より美しくするにはどうすればいいかを考えるべき時代だと思います。町の景観は、町の営みの結果で造られていくもので、そこを大事にすべきだと思います。昔、伊豆半島を全て廻ったとき、海辺では塩分をたっぷり含んだ海からの風を出来るだけ避けようとしてしまったから、海に面するところには家は殆ど造られていませんでした。ところが観光客は海の眺望を求めますから、ホテルや別荘ではオーシャンビューを売り物にし、競って海が見えるところに建物を造るようになりました。その結果、以前は自然のスカイラインであったところが、我が物顔にホテルや別荘が出来、あたかも道を行く人たちを見下ろすようになっています。

東京オリンピックに向けて、お台場に大型マンション群が生まれそうですが、私は非常に疑問視しています。3つの理由があります。一つは海辺の景観がますます悪くなり、海の眺望をそれらの高層マンションが全て奪ってしまうようになることです。本来海の眺望権は、国民すべてのものであって、それを高層マンション群が“奪う”のは、如何なものでしょうか。

もう一点は、海岸縁に高いビル群が建ち並びますと、「風通し」がますます悪くなるということです。東京の都心部で夏の暑さを味わってみれば、如何に心地よい風に吹かれることの有り難さが身に沁みると思います。2013(平成25)年7月10日の『日本経済新聞』の「春秋」欄に、1934(昭和9)年に寺田寅彦が、東京湾から吹く夕風の心地よさを、「夏の夕べの涼風は実に帝都随一」と褒め称えているということを紹介していました。そして海風だけではなく、寅彦と同時代に生きた作家長谷川時雨も、「夏の下町の風情は大川から、夕風が上潮と一緒に押上げてくる。洗髪、素足、盆提灯、涼台、桜湯すずみだいお邸方やしきや大店の歴々には味わえない町続きの、星空の下での懇親会だ」と紹介しています。

今の東京の都心や下町の多くは、心地よい風などはおおよそ期待できず、ヒートアイランド現象に悩まされ、電気が何処から来るかを考える余裕もなく、クーラーを掛けまくっているのが現状でしょう。東京の都市計画がお粗末だったことが原因ですが、日照権については考慮されていても、風に関してはビル風対策や暴風対策はあるものの、心地よい風を護ることは一顧だにされてこなかったことも問題です。2020年には東京オリンピックも開催されることですから、湿度の低い欧米からのお客さんには、東京の蒸し暑さには悲鳴を上げるのではないのでしょうか。これからは風通しの良いまちづくりを目指し、「風通権」を確立し、快適な都市づくりを目指すべきではないかと思います。

3点目は、総人口が増えないのにそういうものを造れば、その分都内(及び近隣県等)の人口が移動するわけで、都内でも過疎化が進むということです。その結果、郊外の商店街などは一層打撃を受けることになるでしょう。小生の事務所の近くの吉祥寺もそうです。今駅周辺の再開発が進んでおり、大きなビルをどんどん出来つつあります。駅ナカも含めてそこにたくさんテナントが入れば、駅から出ないで買い物が全て間に合ってしまうから、周辺の商店街、とりわけ駅から離れた商店街は強烈なパンチを受ける

と思います。通勤の前後に買い物を済ませる世代には、便利かもしれませんが、住宅をベースに生活している人にとって、近くに商店街がなくなることは、ご近所を歩き回る楽しみが無くなり、まちを歩く人がますます少なくなります。小生の住む渋谷区富ヶ谷二丁目一帯も同様に、レイチェル・カールソンの『沈黙の春』は、ますます他人事ではなくなりました。

今、地方において将来の人口減を見越してコンパクトシティ構想が検討されているようですが、東京などの都市でも同じで、歩いていける範囲で快適にくらせるコンパクトな空間を造るべきではないかと思います。毎日歩くのは、老人の運動にもいいですし、それで健康になれば国の医療費の軽減にも繋がります。一人住まいの人だったら、しゃべるのはお店屋さんぐらいしかありませんから、季候・季節の話、子や孫がどうしたとか、そういう会話ができるように商店街も残すことを考えるべきでしょう。

コンパクトで快適な都市づくりにあつては、むやみにものを増やすことなく、国土強靱化として鉄筋やコンクリートをぶち込むのではなく、これからは今まで造ってきた“悪いもの”をいかに取り払うか、「引き算」の時代ではないかと思います。この間、島村菜津さんの書いた『スローシティ』というイタリアの都市づくりを読んで改めて感じましたが、今、日本がやらなきゃいけないのは、住民の「昨日・今日・明日」を考え、「足を知る」ことではないかと思います。そして個々の人間もそうであるように、住む地域も個性を大切に、誇りの持てる“らしい地域”に住みたいものだと思います。その延長線上に、国土総景があり、観光立国があるのではないのでしょうか。

②集落単位で「観光からのまちづくり」を進めること

そういう意味で、私としては「集落単位のふるさとづくり」という概念を、声高に主張したいと考えています。今住んでいるところを、出来るだけ自分達の力で魅力的にすることが、域外の人を惹きつけ、結果的に観光開発になり、集落の存続に繋がると考えています。

全国の人口が減少し始め、東京等の大都市の総人口(域内では更なる人口集中がある一方で、人口が減少しているところもある)は、さほど変わらないと見られていますから、その分地方の人口減少は深刻で、消滅する集落も増えると思われています。そこで東京に人口が集中するのを防ぐ、ダムの役割を話すような地方の中核都市の育成を急げとか、1箇所に諸施設を集めるコンパクトシティ構想が喧伝されています。小生はそれには否定的で、まずもって各集落が趨勢に流され、諦める前に、「自分達のふるさとが無くなってもいいのですか!?!、まだやれることがあるのではないのでしょうか」、その思いで西米良村を応援してきました。

再三言いましたように、西米良村は合併を拒否して、少ない人口ながら単独で生きていく道を、村民の総意で選択しています。職員の給与などは、率先して削減していますし、古い庁舎を建て替える計画などは聞いたことはありませんし、始業前の15分前に全

職員が集まり、役場の掃除をしています。そうした風土の中で西米良村の「観光からのまちづくり」はスタートし、ゆっくりながら着実に成果を挙げてきています。まず、役場のある村所地区において、西米良温泉の整備が嚆矢となり、川の駅、村の駅等も加わり、観光客の誘致にそれなりの成果を挙げました。そして「負けてはならじ」と、かつてお城があり、中心地だった小川地区においても民話語りや山菜祭りが始まり、作小屋村を整備され、村所の人気を脅かすほどになりました。そして上米良地区でもジビエ工房が整備され、本格的な“集落おこし”が始まろうとしています。実際に目の当たりにして目を凝らして見れば、「これで大丈夫だろうか」という脆弱さを孕んでいるのが実状です。しかし、西米良住民は知っています。西米良村という名前から窺えるように、かつては東米良村という村がありましたが、1962(昭和37)年に西都市と合併し、以降火が消えるように寂れていったことを。そして西都市の職員が、「東米良の振興を図るべきではないか」と言われた時、「この財源が乏しい時、寝た子を起こすようなことは出来ない」と語ったことも耳にしています。

人手の少ない集落の活性化は、始めるときもそうですが、始めた後でも大変で、“小さな成功”に酔っている暇はありません。コンサルタントが「新しい魅力を追加しないと墜落してしまいますよ!」とハッパを掛けますが、地元のスタッフは正直「もう目一杯」と思っておられるであろうことも、薄々感じています。しかし、是非とも皆さん方の集落を護り続けて欲しいと思っています。藻谷浩介さんが『里山資本主義』という本を出され、我が国の再生の一策が「里山の活用だ」と主張されています。理念や手法は少々違いますが、自分の居所がはっきりしている小さな集落の居心地良さは、今以上に評価される時期が来ると考えており、そこに観光的な魅力を感じる人が少しずつでも増えていたことを感じられたのが、小川地区の作小屋村であり、西米良村での貴重な体験です。今後どのような合併やコンパクト化があろうとも、西米良村は生きていけると思います。そして余生を掛け、西米良村を応援していこうと決意しています。

③不易流行の「不易」を大切にすること

私も71歳になり、半世紀近く観光地域の盛衰を見てきて、松尾芭蕉の俳諧理論「不易流行」の凄さに、今更ながら感服しています。「流行」も時には必要でしょうけれども、基本はその地域ならではの「不易」を知り、大切にすることではないかと思います。観光施設にあっても、その施設ゆえの「不易」をしっかりと踏まえるべきではないかと思います。

例えば、宿泊施設について言えば、元々は家族で経営していたようなホテルや旅館が、高度成長期やバブル期に目一杯借金をして敷地一杯に施設を大型にし、契機の冷えに伴い行き詰まり、倒産したり、ファンド等を買われてしまった例を実に多く見てきました。そして今残っている施設を考えますと、日本の旅館の基本;不易はやはり個人企業ではないかなと思います。つまり、「家業」で、家にお客さんが訪ねてきたように、精一杯おもてなし

をすることが、日本旅館の良さだと考えています。それと大事なのは地域への溶け込み、たたずまいづくりです。そして、「この宿いいですね、町いいところだね。ここに住まわせてもらおうか」と思えるのが、本来の観光地だと思います。

「観光からのまちづくり」にあっては、人、自然、歴史・文化が不易中の不易だと考えています。西米良村の「観光からのまちづくり」にあっては、住民の人の良さ、凜とした生き方が基本になっています。見方を変えれば、どこの地域においても、人の魅力は必ず発見できると思います。綾町では、照葉樹林の「自然」が、旧南郷村では百済王族が逃れてきたという「歴史」が、基本コンセプトの核になっています。これらに関しても、人同様何処にでも「その土地ならではのもの」を発見できるはずですが、肝は何処までこだわり続けるか、だと思っています。

④学童に対する「観光教育」を進めること

前述した『カリブ観光教本』に強い刺激を受け、宮崎県で我が国最初の「観光副読本わたしたちにできることってなあに」が出来、それがきっかけになって油津中学校の「僕ら観光隊」、鵜戸中学校のサーフィン受業、南郷中学校の課外事業でシーカヤックの課外事業が始まり、一躍宮崎県は「観光教育」の先進県に躍り出たことは、素晴らしい快挙だったと考えています。しかし、残念ながら宮崎県の「観光教育」は一気に拡充というわけにはいかず、その後は一進一退の状況のようです。いわんやそれに追随したのは、全国で散見される程度で、国としては、まだ「観光教育」に取り組む姿勢を見せていません。観光が優れて文化であり、かつ成熟するには時間のかかるものですから、じっくり腰を落としてかかることも必要でしょうが、小さいときに肝心なことをしっかり教えることも大事であり、学童に対する「観光教育」も一日も早く取り組むべきだと考えています。その意味で、東京オリンピックはいい機会ではないかと思っています。

戦後において、宮崎をして“新婚旅行のメッカ”に育て上げた岩切章太郎翁は、ガイドを乗せた観光バスを1931(昭和6)年に走らせています。その当時観光バスが走っているのは東京のはとバスの前身と別府だけでしたが、日本一を目指すなら宮崎でもやろうと決意し、バスガイドの養成も自ら取り組んでいます。「お年寄りが来たら自分の親戚のおばあちゃんなどのつもりでやりなさい、子どもさんが来たら親戚の子どもが来たようにやりなさい」と、指導をしたそうです。バスガイドが当時人気だったせいもあるけど、優秀な子も集まり、かつ優秀なトレーニングをしたことが、宮崎の観光の基礎をつくったわけです。子供達に「じぶんのふるさとを、大人の外国人が来たら自分の親戚のおじさんや小母さんに話すように、子どもの外国人が来たら、学校の仲間に話すように話しかける」ことを、教育するわけです。

それに先駆け、じぶんのふるさとをきれいにする活動を実施すべきでしょう。自分達が植えた花なら余計大切にしますし、紹介する際にも誇りを持って話せるのではないのでしょうか。花を植えるにあたって、最初は無いよりあったほうがいいですし、植えるな

ら量があったほうがいいし、珍しい花の方がいいとなっていきますが、最終段階には「その土地らしさ」という、たたずまいづくりに行き着くと思います。つまり、「我がふるさと縁の花」を、「我がふるさとらしい植え方で植える」ことを教えていくことが望まれます。

最近伝統芸能に関心を持つ子供が増えています。西米良村では、小生が最初に行ったときは、「神楽の舞い手がいなくなる」と心配していましたが、今の青年団は非常に熱心で、その姿を観て育ったこどもの中には、小学生から神楽を舞う子供達が出て来ました。これも立派な観光教育だと思います。小生が住んでいる渋谷区でも茶道をやりたいという男の子もわずかですが増えているそうです。渋谷区の千駄ヶ谷小学校では以前から、茶道を取り入れた教育を続けており、教えに行っている女房は、「すごく良い御菓子を使っており、子供達幸せ」と羨ましがっています。

いろいろな形の観光教育がありますから、国はしっかり方針を決め、後は各自治体の裁量に委ね、しかるべき時に子供達をしっかり顕彰することだと思います。しかし、観光教育を受けた子供達は、訪れた方から「あなたの町素敵ね!」という言葉で、最高の宝として心に刻むのではないのでしょうか。是非、こんな夢が一日も早く叶うことを願っています。

2013 年 11 月 6 日

会場：リージョナル プランニング会議室

同席：リージョナル プランニング 前田暢

取材者：公益財団法人日本交通社 観光政策研究部

梅川智也、後藤健太郎

2014 年 6 月 24 日文章校正・追加終了

7 月 11 日最終校正終了

*あわせて『前田豪未発表コラム』(<http://blog.livedoor.jp/mgcolumn/>)もご覧下さい。

本レポートの引用・転載に関しましては、以下 URL をご確認ください。

<http://www.jtb.or.jp/etc>